

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センターニューズレター vol.14 (2024年度)

# IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

*EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS*



El Cid Campeador en la Plaza del Mío Cid (Burgos, España)

## 目次

### 公開講座

2024年6月6日(木) 5206教室 & オンライン

私が面白いと思うスペインの歴史トピックス ―複雑怪奇なスペイン史―

永田 智成 (南山大学)

**Spanish History Topics That I Find Interesting:**

**The Complicated and Mysterious History of Spain**

NAGATA, Tomonari (Nanzan University)

1

.....  
<https://www.kansaiuidai.ac.jp/news/detail/?id=2247&cat=2&p=252>

2024年6月24日(月) マルチメディアホール & オンライン

「語学を武器に夢の<sup>リング</sup>舞台を目指せ! ―メキシコ民衆文化『Lucha Libre

(メキシコプロレス)』を日墨の架け橋に―」開催報告

(報告者) 魚住 真司 (関西外国語大学)

**Event Summary: Let Language Skills Be Your Tickets to Make Your Dreams Come True**

UOZUMI, Shinji (Kansai Gaidai University)

7

.....  
<https://www.kansaiuidai.ac.jp/news/detail/?id=2270&cat=2&p=228>

### 第17回スペイン語教授法研究会

20 de julio de 2024, sábado ONLINE / 2024年7月20日(土) オンライン

**La conversación y la interacción oral en la clase de ELE en Japón: consideraciones a partir de la investigación para su enseñanza y evaluación**

García Ruiz-Castillo, Carlos (Universidad de Hiroshima)

日本の外国語としてのスペイン語教育における口頭対話

―教授および評価の研究に基づく考察―

ガルシア・ルイス・カスティージョ、カルロス (広島大学)

..... 15

## 連続公開講座

### 魔術的リアリズムの国、南米コロンビアの魅力を知る（全3回）

第1回 2024年10月22日（火） マルチメディアホール & オンライン

“魔術的リアリズムの国”、南米コロンビアってどんな国？その魅力を紹介：

コロンビアの魅力—産業、文化、観光、食文化等

ゴメス、フアン・カミロ（コロンビア大使館商務参事官／  
コロンビア投資貿易観光振興機関（ProColombia）日本代表）

**Descubre Colombia fascinante, un país de “realismo mágico”；Qué tipo de país es Colombia?:**

●descubre sus atractivos. ●Industrias, cultura, turismo, gastronomía etc.

GÓMEZ, Juan Camilo

(Consejero Comercial de la Embajada de Colombia en Japón /

Director ProColombia en Japón)

22

<https://www.kansai.ac.jp/news/detail/?id=2447>

第2回 2024年11月12日（火） マルチメディアホール & オンライン

知られざるコロンビアの素顔 —その魅力と歴史—

寺澤 辰磨（日本コロンビア友好協会会長／  
元駐コロンビア共和国特命全権大使）

**La cara oculta de Colombia: su encanto y su historia**

TERAZAWA, Tatsumaro

(Presidente de la Asociación de Amistad Colombia Japón /

ex-Embajador de Japón en Colombia)

28

<https://www.kansai.ac.jp/news/detail/?id=2485&cat=2>

第3回 2024年11月26日(火) マルチメディアホール & オンライン  
ラテンアメリカ文学との出会い

木村 榮一 (神戸市外国語大学名誉教授/  
スペイン文学・ラテンアメリカ文学翻訳者)

**El encuentro con la literatura latinoamericana**

KIMURA, Eiichi

(Profesor Emérito de la Universidad de los Estudios Extranjeros de la Ciudad de Kobe /  
Traductor de la literatura de América Latina y de España)

..... 46

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=2503&cat=2>

教員エッセイ

バルセロナ市の都市自治体関連獣皮紙文書群の調査について

中嶋 耕大 (関西外国語大学)

**Análisis de la serie de pergaminos municipales del Archivo Histórico de la Ciudad de Barcelona**

NAKASHIMA, Kohta (Universidad Kansai Gaidai)

..... 54

表紙：エル・シッドの像 (スペイン)

公開講座

2024年6月6日(木) 5206教室 & オンライン

私が面白いと思うスペインの歴史トピックス  
—複雑怪奇なスペイン史—

永田 智成 (南山大学)

**Spanish History Topics That I find Interesting:  
The Complicated and Mysterious History of Spain**

**NAGATA, Tomonari (Nanzan University)**

Abstract:

Spain's history is an upheaval one. It is a history that is not only turbulent, but also complex and mysterious, making it difficult to study. As a result, it is easy to imagine that some people end up hating learning about Spanish history. Even researchers who specialize in Spanish history find Spanish history difficult to understand. Therefore, in this lecture, I will talk about the charm of Spanish history, focusing on what I find particularly interesting in Spanish history, as a person who has been engaged in Spanish historical research.

1. はじめに

スペインの歴史は複雑怪奇そのものであると思っている。今回はスペインの歴史の中で、筆者が面白いと感じたトピック5点に絞って述べる。

2. 歴史が苦手な人へ<sup>1</sup>

筆者は歴史が好きであるが、歴史が嫌いな人がいることも承知している。歴史を学ぶ上で最も重要なことは想像力ではないであろうか。歴史には法則性や原因がある。それを学ぶのが歴史である。

ここでは2つの考え方を紹介しておきたい。ひとつは、人類が歩む道というのは同質的であるということである。それは、空間的に隔たっていても、同じようなことが起こり、時代として異なっても、同じようなことが発生する。例えば、日本とスペインでは距

---

<sup>1</sup> この節は、E.H.カー『歴史とは何か』(清水幾太郎訳)岩波書店、1962.を参考に、筆者が強調したい歴史の学び方について述べている。

離にして約1万キロ離れているが、共に石器時代というものがあつた痕跡がある。この両国が、その時代にお互いに影響したわけではなくても、似たような歩みをしている。また、人間は学ばないといえはそれまでであるが、王位継承争いが最も戦争に発展しやすい。これはいつの時代もそうであるため、時間的に隔たりがあつても、同じようなことが起きる証左である。

もうひとつは、上記とは正反対のことであるが、空間や時代が異なれば、人類の歩みは異なるというごく当然な話である。例えば、スペインには武士が支配した時代はないし、時代が変われば戦争の形態も変わる。中世にはミサイルや戦闘機が存在しないとといった具合である。

このような時間的・空間的な異質性や同質性を考えながら、歴史を見ると、また違った見方が出来るのではないだろうか。

### 3. スペイン史の概要<sup>2</sup>

最初にスペインの歴史の概要を述べておきたい。厳密に言えば、スペイン王国が誕生するのは15世紀後半である。それまで、現在のスペインがあるイベリア半島には様々な国が存在した。ここでは、スペイン王国誕生以前も含めて、スペインの歴史として扱う。

イベリア半島の特徴として、古代から肥沃な土地および豊富な鉱物資源を求めて、様々な民族がやってきたことが挙げられる。共にイベリア半島を求めたカルタゴとローマは、ポエニ戦争という形で激突する。紀元前3世紀から紀元前2世紀にかけて行なわれたポエニ戦争に勝ったローマは、イベリア半島を支配下に収め、イベリア半島はローマの繁栄を支えたのである。

やがてローマは衰退し、5世紀には西ゴート王国が成立する。しかし西ゴート王国による支配は安定せず、8世紀初めの711年にイスラーム王朝であるウマイヤ朝の侵攻により、西ゴート王国は滅亡した。ここから1492年にナスル朝グラナダ王国が滅亡するまで、イベリア半島はイスラームの王朝とカトリックの王朝が共存する、いわゆるレコンキスタの時代となる。

15世紀後半、いわゆるスペイン王国が誕生する。スペイン王国はレコンキスタを終わらせ、さらに政略結婚を通じてハプスブルク家と懇意になり、ハプスブルク朝スペイン誕生の礎となる。ハプスブルク朝スペインの中でも、16世紀のカルロス1世とフェリペ2世の時代がスペイン帝国となったスペインの最盛期であった。「日の沈まぬ帝国」と呼ばれたのである。

1700年にカルロス2世が子孫を残さず亡くなると、その後継の座をめぐって、スペイン

---

<sup>2</sup> この節の記述は、筆者が久木正雄氏と著した『一冊でわかるスペイン史』河出書房新社、2021.を参考にした。

継承戦争が勃発する。ヨーロッパ全体を巻き込んでこの戦争の結果、スペイン王国はブルボン朝による支配となった。1789年に発生したフランス革命の余波はスペインにも及んだ。革命の混乱を收拾したナポレオンは、自身の兄をホセ1世としてスペイン王に即位させ、その決定に反発した人々が中心となって、いわゆるスペイン独立戦争が勃発する。スペイン独立戦争に勝利した人々によって、ブルボン朝が復権する。しかし、自由主義の流れは、スペインにおいて少しずつ浸透していき、1873年に成立した第一共和政が10か月で崩壊するのを経て、1875年に王政復古体制が成立した。

20世紀のスペイン史は激動の歴史である。前世紀の1898年に米西戦争に敗北し、事実上全ての植民地を失い、「スペインとは何か」を模索する。その過程の中で、スペインは二度の独裁制を経験する。1923年にプリモ・デ・リベラ体制が成立し、1931年に成立した第二共和政を挟んで、1936年にはスペイン内戦の最中、フランコ体制が成立する。フランコによる支配は約40年に及んだが、1975年のフランコの死後、スペインはスムーズに民主化を達成し、現在ではEUの主要国として、その地位を固めている。

#### 4. トピック① 一筋縄ではいかない発展

日本の歴史に馴染みがある者からすると、人類は右肩上がりに進化しているという感覚を持っていると思う。実際、日本の歴史では、奈良時代より平安時代、鎌倉時代より室町時代という形で、発展段階が進んでいると思われる。

ところがヨーロッパ史を考えた場合、そう順調に進化していると言えないと思われる。例えば、水道の歴史を考えた場合、古代ローマ帝国には水道設備があり、入浴文化があったが、その後の中世ヨーロッパにおいて、いわゆるお風呂文化は存在しない。パリで12世紀に下水道が整備されたという歴史はあるものの、本格的な整備は19世紀に入ってからであると言われている<sup>3</sup>。

つまり、発展に断絶がある。芸術に目を向けても、ローマ彫刻と、西ゴート王国の抽象的な美術品では系統に大きな差が見られる。日本は、島国であるという地理的要因や支配層の継続性の高さが右肩上がりの発展の歴史を作ったと言える。ヨーロッパの歴史に目を向けると、日本のそれが常識というわけではないということがわかる。

#### 5. トピック② レコンキスタの実像<sup>4</sup>

レコンキスタは、日本語では再征服運動または国土回復運動と呼ばれ、イスラーム勢力に占領されたイベリア半島をカトリック勢力が約800年かけて取り返す壮大な歴史であると信じられている。しかしこのレコンキスタの物語は、多分にフィクションが入り混じっ

<sup>3</sup> 茂庭竹生『改訂上下水道工学』コロナ社、2007、3 - 4頁。

<sup>4</sup> この節は、黒田祐我『レコンキスター「スペイン」を生んだ中世800年の戦争と平和』中央公論新社、2024.を参考にした。

ていることがわかっている。

まず取り返すためには、イスラーム勢力によって滅ぼされた西ゴート王国の末裔でなければできないが、レコンキスタの主役であったカスティーリャ王国がその末裔であった可能性は低い。おそらくは、新興勢力であったカスティーリャ王国が、侵略ないし征服よりも「カッコいい」再征服ということにして、領土拡大の大義名分にしたのではないかというのが近年の研究成果である。

このレコンキスタの物語に反する事実として、カトリック勢力はイスラーム勢力と国境が接する 10 世紀末頃まで、イスラーム勢力を意識しておらず、カスティーリャ王国は他のカトリックの王国との戦争も多い。ナスル朝グラナダ王国との関係でいえば、カスティーリャ王国は、一時期グラナダ王国を庇護下に入れており、そういう意味では、両勢力は共存していたと言えるのである。

## 6. トピック③ どこまでも王様が好きなスペイン<sup>5</sup>

15 世紀末にスペイン王国が成立してから王様のまま亡命した王様は、ホセ 1 世も含めると 5 人いる。一般的に王様がいなくなれば、真っ先に選択肢として共和政が思い浮かぶが、スペインでは、そう簡単にはならなかった。

フェルナンド 7 世 (1784-1833) は、ナポレオンに次期国王は自分の兄のジョゼフであると言われてそれを受け入れ、フランスに亡命した。ホセ 1 世の即位に反対する勢力は、フェルナンド 7 世の帰還を掲げてスペイン独立戦争を戦い、フェルナンド 7 世の帰還を叶えたが、当のフェルナンド 7 世はホセ 1 世を応援していたと言われており、皮肉なものであった<sup>6</sup>。

1868 年に 9 月革命はイサベル 2 世 (1830-1904) の統治に反対した勢力によって実行に移され、その結果、イサベル 2 世は亡命したが、すぐに共和政とはならなかった。イタリアのサヴォイア家よりアマデオ 1 世 (1845-1890) を即位させて、君主制の継続を図ったものの、アマデオ 1 世が自らイタリアに帰国したために、共和政が成立するという経緯をたどることになった。

プリモ・デ・リベラ体制の成立に加担したアルフォンソ 13 世 (1886-1941) は、1931 年の市町村議会選挙の結果を見て、君主制支持者が相対的に減っていることを認識し、亡命した。その結果、共和政が成立することとなったが、共和政においても、君主制支持者は一大勢力を築いていた。

このように、スペインの歴代国王は、良き統治をする王ばかりではなかったが、統治形態としての君主制という選択肢が消えることはなく、あのフランコ体制も公式に国王不在

<sup>5</sup> 拙稿「スペイン政治における国王という存在」『社会科学論集』164 号、埼玉大学経済学会、2021、56 - 59 頁.を参考にした。

<sup>6</sup> 川成洋・坂東省次・桑原真夫『スペイン王権史』中央公論新社、2013、138 - 139 頁。

の王国として規定したのであった。

#### 7. トピック④ フランコの「カメレオン」戦略

20世紀のヨーロッパにおいて、約40年間、ポルトガルと並んで、独裁国家が存続したことは、驚異的なことであり、依然としてなぜフランコ体制が長期にわたって存続し得たのかは、重要な研究テーマである。その問いの答えのカギを握るのが、フランコの「カメレオン」戦略にあると筆者は考えている。カメレオンは、得意な体色変化という特性を生かして、背景に溶け込むことで知られている。フランコ体制も、カメレオンのように、「体色変化」を駆使して、激動の国際社会を渡り切ったのではないかというのが、筆者の仮説である。

フランコ体制は、ファシズム体制を模倣して成立したが、フランコ自身にファシズムに関する深い理解は見られず、観念的なイデオロギーの固執も見られない。せいぜいカトリックによる統治、反共産主義、反フリーメーソンといったメンタリティーが垣間見えるくらいである。

1936年に始まったスペイン内戦において、フランコはドイツやイタリアが中心となって形成する枢軸国側の協力を得て、内戦に勝利した。1939年9月から始まった第二次世界大戦においては中立を保ち、1942年以降、ドイツの旗色が悪くなっていくと、反共産主義を強調して、英米に接近した。第二次世界大戦が終結すると、国連から排除され、一時期国際社会から孤立するが、米ソ超大国による冷戦が開始されると、米国がスペインの反共の防波堤という役割を重視するようになり、1953年のスターリンの死も追い風となって、米国の協力のもと、1955年にスペインは国連への復帰を果たす。

1959年には体制のアイデンティティのひとつであった自給自足経済体制を放棄し、市場経済を導入する。その結果、OECD加盟国中日本に次いで第二位の高度経済成長を達成し、1975年に亡くなるまでフランコは独裁者としての天寿を全うしたのである。

このような対応が、計画的であったかどうかはさておき、フランコ体制が長期にわたって存続し得た要因のひとつと考えられる。

#### 8. トピック⑤ トンチのきいた非正規移民対策<sup>7</sup>

スペインでは1994年より長期にわたって好景気に恵まれていた。景気が良かったので、多くの外国人が出稼ぎに来ていたが、出稼ぎ労働者の移入を想定していないスペインでは、関連法案の整備が遅れ、正規の許可証を有さない非正規移民が大量に国内で確認されていた。

---

<sup>7</sup> この節は、Cebolla Boado, Héctor y Amparo González Ferrer (coord.) *Inmigración ¿Integración sin modelo?*, Alianza Editorial, 2013.を参考にした。

1997年のアムステルダム条約発効以降、シェンゲン協定域内において、人の移動の自由が保障されるようになった。スペインに入国した非正規移民が他国に移動することは、スペインの責任が問われる可能性もあり、非正規移民を削減する必要がスペインにはあった。

非正規移民の削減と聞いて、真っ先に思い浮かぶ国費による強制送還は、非正規移民が100万人近くいるとされる状況において、現実的な選択肢ではなかった。そこで、スペインがとったやり方が、非正規移民の正規化、すなわち、非正規移民に対して、正規の滞在許可証を交付するというものであった。

これまで何回か非正規移民の正規化は実施され、2024年現在、最後の正規化は、2005年に実施された。この正規化は最も大規模なものであった。この正規化によって、非正規移民約58万人が正規の滞在許可証を手にする事になり、非正規移民を大幅に削減することに成功したのである。

## 9. おわりに

本稿では、筆者が興味深いと考えるスペイン史のトピックを取り上げ、また歴史の注目すべき点などについて述べた。本来、歴史の学習と暗記は無関係のはずである。スペインの歴史に惹かれる人、スペインでなくても歴史の魅力にとりつかれる人が増えれば、本望である。



永田 智成氏 (2024年6月6日)

## 公開講座

2024年6月24日(月) マルチメディアホール & オンライン

「語学を武器に夢の<sup>リング</sup>舞台をめざせ!

—メキシコ民衆文化『Lucha Libre (メキシコプロレス)』を  
日墨の架け橋に— 開催報告

(報告者) 魚住 真司 (関西外国語大学)

**Event Summary: Let Language Skills Be Your Tickets  
to Make Your Dreams Come True**

**UOZUMI, Shinji (Kansai Gaidai University)**

Abstract:

The Kansai Gaidai Newsletter featured Harutoki, a graduate of the Spanish Language Department and a current professional wrestler, in its 305th issue (GAIDAI, Spring 2021). Harutoki, who has admired *Luchadores* (Mexican professional wrestlers) since his elementary school years, continued to train his body while studying Spanish at Kansai Gaidai University. He eventually obtained a *Luchador* license from *Ciudad de Mexico* and *Commission de Lucha Libre Professional*. With Harutoki's motto "Where there is a will, there is a way," he shared an inspiring message with current students during a talk event held at the Kansai Gaidai campus on June 24, 2024.

Meanwhile, in 2021, Japan's Emperor awarded the *Kyokujitsu-soukoushou* (Order of the Rising Sun) to Mil Mascaras (82), a legendary figure in Mexican wrestling, in recognition of his significant contributions to fostering mutual understanding between Mexico and Japan. At this event, Harutoki, along with a former wrestling magazine editor Tsutomu Shimizu who is well known for his extensive research on Mil Mascaras, explored the history and allure of *Lucha Libre*. The event also highlighted the potential of popular culture (such as *Lucha Libre*) as a driving force to deepen friendship between Mexico and Japan.

### 1. ルチャ・リブレとは

2024年6月24日、山森靖人研究員と協力して、公開講座「語学を武器に夢の舞台(リング)をめざせ!」の開催にこぎ着けた。2011年から始まった本研究センターの活動の中で、Lucha Libre (以降「ルチャ」と表記)に関する催しは今回が初めてという。メキシコにおけるルチャは、サッカーに次ぐ人気スポーツであり、総勢2,000人とも3,000人とも言われる選手たちが週末を中心にメキシコ各地で試合をする<sup>1</sup>。しかし、実力で勝敗を決することが最大の目的である競技としてのサッカーと、原則的に勧善懲悪が試合のテーマである興行としてのルチャを同列に扱うのは難しい。そのような、競技の分類につきまとう

困難が<sup>2</sup>、これまでルチャを学術から遠ざけてきたのかもしれない。

一方、今回の公開講座の題目では、「メキシコプロレス」という表現を用いている。これは、「四角いリング上でレスラーたちが技を競い合う」といった言葉のイメージが、ルチャを説明するにあたり便利だからである。しかしながら、本来ルチャは米国の大衆文化としての「プロレス」と区別されなければならない<sup>3</sup>。ルチャについての論考がある加藤隆浩氏によると、1930年代に米国から導入されたプロレス興行が、メキシコの地において土着化するうちに、社会・文化的に特殊な意味を持つようになった。土着化の過程で根付いた、ルチャの三原則である「スピード」「勸善懲悪」「ファン・サービス」のいずれもが、米国の「プロレス」にはあてはまらないという。つまり、「メキシコに存在するのはルチャであって、プロレスではない」<sup>4</sup>のである。

加藤論考のルチャ三原則に、一つの準原則を付け加えるならば、それは「エンマスカラド（覆面を着用した選手、女性の場合はエンマスカラダ）」が多数派であることだろう<sup>5</sup>。そして、その覆面（およびマント等のリング・コスチューム）に施された意匠は、メキシコの古代文明を想起させるものが少なくない。加藤論考が指摘するように、厳密には「ルチャの起源と太古の慣習との間にははっきりした連続性は何もない」<sup>6</sup>のかもしれない。しかし一方でまた、ミル・マスカラス（善玉の世界的代表選手）やカネック（悪玉だがアメリカ人レスラーとの試合では善玉化する）といった、ルチャの頂点を極めた選手らが、誇らしげに身にまとう豪華絢爛かつ繊細なデザインの覆面や衣装を眺めていると、「古代文明の中にある神々たちへの仮面信仰がマスクに結びついた」<sup>7</sup>と説明を受けても何ら違和感はなく、むしろそう解釈する方が自然であるように思われる。本講座の題目が、ルチャを「大衆文化」とせず、あえて「民衆文化」としているのは、ルチャの担い手たちが覆面や衣装を通して民族性を強調し、観客もまたそれを「ビバ！メヒコ！」と謳歌しながら受け止め、自らの民族性を確認しようとするからである。

## 2. 公開講座・開催にむけて

今回の公開講座の開催は、実現にむけて数々の偶然が重なったことが幸いした。まず2021年3月、本学キャンパスにひととき目立つ学生の姿があったことに話は始まる。その学生は180センチの上背に、手にはチャンピオンベルトを携えていた。2017年に本学スペイン語学科に入学した晴斗希選手（現・道頓堀プロレス所属）である。彼の在学中、大阪の此花区に試合を見に行った山森研究員に、彼は律儀にも卒業の挨拶にやってきたのである。卒業式当日、その達成感あふれる表情の彼に、谷本榮子理事長から直々に祝福と激励の言葉がかけられ、そこに山森研究員と報告者である私も同席できたことは幸いであった<sup>8</sup>。

そこで山森研究員と私の2人は、改めて何らかの機会を設け、晴斗希選手に外大生を鼓舞してもらいたいと考えるようになった。本学で修得したスペイン語と、高校時代に器械

体操で培った柔軟で逞しい身体を武器にして、長年の夢であったルチャのリングに上がることに成功した彼に、「我に続け！」とメッセージを発してもらおう機会を作りたいと願うようになったのである。

そんな思いの中、晴斗希選手が卒業して数か月後、驚くべき事態が訪れた。あの、「千の顔を持つ男」との異名を持つ覆面レスラー、ミル・マスカラス選手（現 82 才）が日墨相互理解への長年にわたる貢献を称えられ、旭日双光章を受章することになったのである。同選手の、全盛時の来日回数は実に 20 回を超える。プロレスファンでなくても、その名を記憶する日本人は少なくない。かつて、記号論で著名な哲学者ロラン・バルトは「善と悪との神話的な戦いをなすのがレスラーである」と指摘した<sup>9</sup>。リンピオ（善玉ルチャドール）が海を越え、アーロン・ロドリゲス・アレジャーノ本人ではなくマスクマン「ミル・マスカラス」そのものが、他ならぬ「八百万の神」の国からその健闘が称賛されたわけである。この奇跡は、バルト風に形容するなら「神話」そのものではないか<sup>10</sup>。

2023 年には、次のようなこともあった。東京国立博物館主催の「古代メキシコ展」が、ほぼ 1 年がかりで東京・福岡・大阪を巡回したのである（2024 年 5 月 6 日まで開催）。この特別展では、古代戦士の土偶や覆面が多数展示され、東京会場では現役ルチャドールのトークショーも開催された。その席上、ゲストに呼ばれたマスクマンが、子供の頃にピラミッドなどの遺跡が常に身近にあった話を披露し、メキシコ人の古代文明への「刷り込まれ方」を感じさせた。加えて、国立民族学博物館主催の特別展「日本の仮面-芸能と祭りの世界」（2024 年 3～6 月開催）が、大阪を活動拠点とする日本人ルチャドール・ルチャドーラのマスクを展示対象に採り上げた。採用されたルチャドールの中でも、スペル・デルフィン選手は例年「枚方プロレスまつり」に出場しているので、展示を見学した枚方の人々には馴染みのマスクに見えたかもしれない。



晴斗希選手入場（2024 年 6 月 24 日）

### 3. 内容と反響・評価

機がどんどん熟していく中で、開催実現に向けて最も背中を押されたのは、元『週刊ゴング』編集長でミル・マスカラス研究の第一人者・清水勉氏とのご縁である。清水氏は、長年プロの取材者としてルチャに接してきた。今もプロレス専門誌『Gスピリッツ』への執筆を通して、ルチャの歴史と現状を分析する。学術機関における公開講座である以上、単なるルチャ礼賛イベントにするわけにはいかないと思案する中、メキシコと同業ジャーナリストたちから「ドクトル（博士）・ルチャ」と敬称される清水氏に、来学を引き受けてもらったのは真に幸運であった。そのようなルチャの大御所をゲストに、講座当日は晴斗希選手に加え、将来ルチャドーラを目指す本学スペイン語学科2年生の女子学生が登壇した。

講座はマルチメディアホールを会場に、林美智代・センター長の開催挨拶に始まり、ほぼ予定時間通りに進行した。ミル・マスカラス選手の入場テーマ曲として有名な「スカイ・ハイ」の音楽にのせて、晴斗希選手が気合一声とともに入場すると、そこから半時間は晴斗希選手の舞台である。メキシコ遠征時の試合映像を通して彼の類まれなアスリートとしての資質を目の当たりにしたあと、晴斗希選手の経歴や本学でのスペイン語修得の話、そして在校生に送るメッセージが披露された。中でも説得力があったのは、憧れの先輩レスラーから「メキシコで仕事を成すためには、いかにスペイン語力が大事であるか」を諭されたエピソードではないか。この助言に、晴斗希選手はスペイン語修得への腹を据えたという。実社会の厳しさを説いてくれる先達ほど、後に続く者にとって大事な存在はいない。

次は400年にわたる日墨交流史に、ルチャの歴史を織りまぜた講演である。清水氏はこのために、ミル・マスカラス選手から贈られた本人使用のマスクを、わざわざ横浜から持参してくれた。初めて聞く貴重な話の連続だったが、本紙幅の都合と、清水氏の今後の執筆活動に影響しないよう、ここではあえて概略にとどめておく。

1609年の千葉県御宿における、座礁スペイン船（含メキシコ人乗組員）への地元村民による献身的な救助活動は、日墨友好の原点と目される。その後、伊達政宗の命を受けた、支倉（はせくら）常長が率いる慶長遣欧使節団のメキシコ上陸（1614年）を経て、日墨交流は1888年の日墨修好通商条約で一つのピークを迎える。その調印は日本にとって初となる平等条約であり<sup>11</sup>、それを可能ならしめたのは当時の駐米公使・陸奥宗光の貢献であったという。やがて日本からメキシコへの移民が始まると、日本の柔術がメキシコを含むラテンアメリカへと浸透しだす。その端緒を開いたのは、「コンデ・コマ」のリングネームで知られる柔術家・前田光世であった<sup>12</sup>。メキシコにおける柔術は多方面に影響したようで、中でも柔術家ゴンサロ・アベンダーニョ師範は<sup>13</sup>、1933年に旗揚げされたプロレス団体EMLLからメキシコ国産レスラー（ルチャドル）の育成を依頼された際、腕の取り方をはじめ、投げ方、関節の極め方等々、独特なレスリング・スタイルを作り上げていったという。つまり、「ルチャの根底には日本の柔術の技術が入っている」というのが清水氏

の見立てである<sup>14</sup>。

最後に、将来ルチャドーラを目指す女子学生の出番である。彼女は、自身の格闘技志向や、既に2度にわたり渡墨しルチャ教室でトレーニングを積んだ実績などを披露した。正直なところ、彼女の本気度は買うにしても、いずれ日本の社会的環境が彼女の前に立ちほだかるのではないかと、私などは懸念していた。ところが公開講座の席上、彼女が晴斗希選手に所属団体への入門を直訴したのである。その突破力に驚かされた。日頃、学生たちにもっと元気を出すよう叱咤している私自身が、突然の入団直訴に慌てたことを自嘲する。

さて、本講座の反響はどうであったか。当日会場に足を運んでいただいた来場者数は53人で、インターネット同時配信への参加者数は39人である。聴衆計92人の内訳は、外大生が39人で「市民・その他」が41人となっており、一般公開された講座として意義のある数字を残せたのではないか。アンケートは、来場者から28名とオンライン参加者から3名の回答を得ており、今回の講座についての「感想」を5段階評価で「とてもよかった（来場22名、オンライン3名）」「よかった（来場6名）」と評している。

具体的には、「晴斗希さんの在校生への一言がぐっときました」「夢を後押しできる大人になりたい、『言語の力のすばらしさ』という言葉が印象的でした」、あるいは「清水様の日墨とルチャの歴史の講義、とても興味深く聞かせていただきました」といった、本講座の企図に見合ったコメントが複数寄せられた。その一方で「もう少し晴斗希選手さんの話を聞きたかった」「マイクの音がすこし大きければ良かった」といった指摘もあり、時間配分やマイクの音声レベルなど司会進行についての課題も浮かび上がった。総じて、所々至らない点もあったが、「第2回をお願いします」とのコメントも頂戴したことから、まずはルチャを公開講座の俎上に載せたことについては「前向きに評価された」と受けとめたい。



左から、晴斗希選手と清水勉氏（2024年6月24日）

#### 4. 出でよ、夢の舞台をめざす女性たち

米国のテンプル大学でラテンアメリカ学を教えるヘザー・レヴィ教授は、自身が大学院生だった 1990 年代後半、ルチャを博士論文のテーマに選んだ。フィールド調査で訪れたメキシコ・シティで、当時 15 校ほどあったルチャ教室の 1 つに入門した際、師匠となる人物から彼女は次のように諭され、男子生徒と変わらないトレーニングを課せられた。「ルチャは、テレビで放送されているようなピエロのショーじゃない<sup>15</sup>。本物のルチャを学びたければ、一歩ずつだ。まず落下と宙返り<sup>16</sup>、そして競技レスリング、柔術の極め技、空手の打撃。そうして、初めてプロレスを学ぶことができるんだ。君が、本当のルチャ・リブレを学びたいのならば、私は教えよう・・・」<sup>17</sup>

これまで、マチスモ（男性優位）が社会の至るところで顔を見せてきたメキシコで、ルチャにおいても女性は周縁に置かれてきた<sup>18</sup>。しかし、レヴィ教授の実体験に基づけば、そこには補足説明が必要になる。メキシコの女性レスラーは、米国のそれと違って必ずしもセクシャルな存在ではない。試合の都合上、聖母的（善玉）と、そうでない役割（悪玉）の分担はあっても、女性レスラーに対するヤジで性的なものは少ないという<sup>19</sup>。レヴィ教授の観察によると、米国では女性レスラーの試合になると女性の観客は一時的に席を離れがちだが、ルチャではそのような傾向が見受けられない。メキシコの、特に高齢女性にとってのルチャドーラは、夫が働きに出た後の地域社会を護ってきた、かつての自分自身の姿が二重写しになる存在で、カタルシスを感じさせるのだという。

ところで本講座を開催する直前、メキシコに初の女性大統領が誕生した。シェインバウム新大統領は、メキシコ市長時代に犯罪組織と対峙し、治安を改善させたことで人々の支持を勝ち取った。ミル・マスカラス選手はメディアの取材に、ルチャの団体幹部にも女性が就くようになったことをあげ、「女性はあらゆる面で男性と同じ権利を持っているという意識が少しずつ目覚めている」と新時代の到来を歓迎した<sup>20</sup>。一方で太平洋対岸の、長年メキシコと友好関係を築いてきた国では、いまだクォータ制導入や選択的夫婦別姓、あるいは皇位継承問題についても議論は停滞気味だ。ふたたびイベロアメリカ研究センターで、今回のような公開講座のお手伝いをする機会に恵まれるならば、本学出身の各方面で活躍する女性たち（スポーツでも政治でも、どんな分野でも良いだろう）を迎えて、この国の新時代到来を祝したいものである。

最後になってしまったが、今回の公開講座は林美智代・センター長のルチャへのご理解、ならびに砂原由美・新津吉太郎の両研究員の協力無しには実現できなかった。山森研究員と共に深い感謝を申しあげる。



晴斗希選手（右から3人目）と清水勉氏（右から2人目）を囲んで（2024年6月24日）

- 1 その総本山は、1956年に開場した「Arena Mexico（アレナ・メヒコ）」と呼ばれるメキシコ・シティの大会場で、毎週末の興行にはおよそ18,000人もの観衆が詰めかける。選手は「ルチャドール（男性）」「ルチャドーラ（女性）」と呼ばれ、各地方会場の、末端の前座選手なども含めると、実は5,000人ほどいるのではないかとの説もある。ちなみにメキシコの人口は日本とほぼ同じであり、日本のプロレスラー数はおよそ1,000人である。
- 2 基本的に、ルチャはサッカーと違って、賭博の対象にならない。
- 3 日本の相撲も、職業上のレスリングという意味ではプロフェッショナル・レスリングである。しかし相撲が「プロレス」と区別されるのは、そこに日本独特の儀礼や民族性を見ることができるからであろう。
- 4 加藤隆浩「ルチャ・リブレー大衆文化のかたち」『ラテンアメリカの民衆文化』（行路社、2009）p.35.
- 5 約6〜7割がマスクマンだといわれている。岩佐敦子「メキシコのプロレス—マスクマンという存在」『現代風俗 プロレス文化』（新宿書房、2010）p.134.
- 6 加藤、前掲書 p.41.
- 7 都築響一編・清水勉文『ストリートデザインファイル 03 LUCHA MASCARADA メキシカン・プロレスと仮面の肖像』（アスペクト、2000年）p.7.
- 8 「第一線で活躍する卒業生にインタビュー Vol.17」『THE GAIDAI』（305号）2021年5月28日、pp.18-19.
- 9 ロラン・バルト（篠沢秀夫・訳）「レスルする世界」『神話作用』（現代思潮新社、1967年）p.15.
- 10 実際の叙勲はコロナ禍の影響もあり、伝達式の形で翌2022年11月にアレナ・メヒコで執り行われた。
- 11 アジア諸国を除く。
- 12 1909年メキシコ入りを経て、1914年ブラジル遠征、ブラジリアン柔術の祖となる。
- 13 来日経験があり、同志社大学で柔道を学んだという。
- 14 事実、ルチャの組手はプロレスの常道と違って、逆手（柔道の組手と同じ）である。
- 15 アメリカナイズされたルチャを積極的にテレビ放送している、近年人気の新興団体を擲

---

揄していると思われる。その興行には、セクシーな「ラウンドガール（ただしルチャはラウンド制では無い）」のような女性が登場する。

<sup>16</sup> 当該 Levi 論文は英語で書かれているため以下推論となるが、恐らくこれは「トレス・クアルトス（メキシコ式の受け身）」のことではないだろうか。メキシコ式受け身については、小林和孝「柔術とルチャ・リブレの関係」『Gスピリッツ』vol.69（辰巳出版、2023年9月）pp.80-94.

<sup>17</sup> Heather Levi, *The World of Lucha Libre: Secrets, Revelations, and Mexican National Identity* (Durham and London: Duke University Press, 2008) p.178.

<sup>18</sup> 1950年代から1986年まで、ルチャドーラは連邦区（現メキシコ・シティ）の試合会場には出場できなかった。まさしく周縁の会場でしか女性の試合は組まれなかったのである。

<sup>19</sup> Levi、前掲書 p.166. あるルチャドーラの試合では、性的なヤジを飛ばした男性観客に対し、会場内で警告アナウンスが発せられたという。

<sup>20</sup> 「男性優位の国、女性トップに期待 レスラーのミル・マスカラス氏-メキシコ」『時事ドットコムニュース』2024年6月1日、(<https://www.jiji.com/jc/article?k=2024060100375&g=int>.)

第 17 回スペイン語教授法研究会

ENCUENTRO ONLINE

20 de julio de 2024, sábado

**La conversación y la interacción oral en la clase de ELE en  
Japón: consideraciones a partir de la investigación  
para su enseñanza y evaluación**

**García Ruiz-Castillo, Carlos (Universidad de Hiroshima)**

**Abstract**

Conversation is a basic type of interaction characterized by certain features, such as free alternation of turns, little planning and dynamism. Although the functioning of conversational organization systems is universal, it may be subject to cultural variations. Japanese conversation is distinguished from Spanish conversation by the prosodic and syntactic fragmentation of turns, the use of frequent quasilexical supporting turns in noncompletion position, and the use of end-of-turn syntactic markers. It is possible that these features influence Japanese learners' L2 conversation, and therefore explicit teaching of interactional practices and resources for carrying them out through repeated practice, dynamic and cumulative feedback, and a valid assessment method is important.

La conversación es un tipo de texto oral que se realiza en mediante interacción, es decir, es un diálogo entre dos o más participantes. Entre los textos orales que se realizan en interacción, hay tres tipos básicos: las interacciones institucionalizadas (por ejemplo, la tutoría con un profesor o una consulta médica, donde uno de los participantes tiene el dominio de la conversación), las transaccionales (por ejemplo, en la previsión de bienes y servicios) y las conversacionales, que son las que nos interesan en la clase de español como lengua extranjera. Este último tipo tiene un fin interpersonal (mantener relaciones sociales con las personas), por lo que tiende a no acabar, y los participantes tienen igualdad funcional, es decir, cualquiera puede tomar el turno de palabra y se caracteriza por la alternancia

libre de turnos. La pregunta que se plantea es, ¿enseñamos en nuestras clases de manera explícita a los estudiantes a tener una conversación cuyo objetivo es que no termine y en la que cada participante pueda tomar la palabra cuando quiera?



Decimoséptima reunión de investigación sobre la didáctica del español

熊 関西外大  
KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

Open workshop in Spanish. *Oral interaction in the Spanish as a Foreign Language classroom in Japan: from research to teaching and assessment.*

**La conversación y la interacción oral en la clase de ELE en Japón: consideraciones a partir de la investigación para su enseñanza y evaluación**

**Carlos García Ruiz-Castillo**  
Universidad de Hiroshima

20 de julio de 2024 (sábado)  
14:00-15:30  
Campus Nakamiya, Edificio principal, 2F, Multipurpose room

Formato híbrido: presencial y vía Zoom

Cuando conversamos, que es la forma básica y primaria de usar el lenguaje, las personas nos coordinamos con una sorprendente precisión gracias a determinados mecanismos o sistemas de organización, entre ellos la alternancia de turnos y la organización secuencial. ¿Cómo se emplean y perfeccionan estos mecanismos cuando se aprende una L2? ¿Influyen la lengua materna de los aprendientes y las actividades didácticas que realizan en clase en su forma de conversar en la L2?

En este taller describiremos brevemente esos mecanismos que posibilitan la interacción oral y las características de la conversación de aprendientes de una L2. Prestaremos una especial atención a la enseñanza de ELE en el contexto universitario japonés y, en la medida de lo posible, presentaremos y analizaremos datos reales. Finalmente, consideraremos ideas y propuestas para diseñar objetivos, proponer actividades y realizar la evaluación en la enseñanza de la interacción oral en una L2.

**Inscripción:**  
<https://agu-sbogoku.furm.kitamosapp.com/public/rsc-bero-spanish>

**Contacto :** [clm.vi@kansai-gaidai.ac.jp](mailto:clm.vi@kansai-gaidai.ac.jp)



Cartel del encuentro online

Los estudiantes de español como lengua extranjera ya disponen del mecanismo interaccional: saben cómo tomar turnos y saben qué son los turnos de apoyo en su lengua materna. Pero tenemos que hacer que sean conscientes de las prácticas interaccionales y de la variación según la cultura y el tipo de interacción que están haciendo. Hay que enseñarles a cómo interrumpir, cómo tomar la palabra mientras otra persona está hablando, etc. Por ejemplo, en japonés es muy propio usar como turno de apoyo el sonido “heeee”, mientras que en español usamos expresiones como “¿de verdad?”. El

japonés es, precisamente, una de las pocas lenguas del mundo que tiene una palabra específica para turnos de apoyo, 相槌 (あいづち、aizuchi) .

También es importante crear oportunidades para la interacción en las que los aprendices desarrollen sus prácticas y recursos interaccionales, y es muy importante la repetición de las actividades de interacción, con un feedback dinámico y acumulado.

Sin embargo, los manuales de ELE ofrecen escasos contenidos para la enseñanza explícita de la interacción conversacional o la libre alternancia de turno. A propósito, el ejemplo siguiente ilustra claramente lo que se espera de una conversación. El objetivo es que los estudiantes elaboren sus intervenciones, reaccionen y no usen excesivamente las preguntas espejo (¿y tú? o repetir la pregunta).

<b>Mal</b>	<p>A: ¿A qué hora te levantas normalmente?</p> <p>B: (...) Me levanto a las siete y media. ¿Y tú?</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B no elabora la intervención.</li> <li>• Empleo de "¿y tú?".</li> </ul>
<b>Regular</b>	<p>A: ¿A qué hora te levantas normalmente?</p> <p>B: De lunes a viernes me levanto a las ocho, pero los fines de semana me levanto muy pronto, a las seis y media. Trabajo en una tienda.</p> <p>A: (...) ¿A qué hora te acuestas normalmente?</p> <p>A: ¿A qué hora te levantas normalmente?</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• B Elabora la intervención.</li> <li>• A no reacciona a la intervención de B.</li> </ul>
<b>Muy bien</b>	<p>B: De lunes a viernes me levanto a las ocho, pero los fines de semana me levanto muy pronto, a las seis y media. Trabajo en una tienda.</p> <p>A: ¿A las seis y media? ¡Qué pronto! Yo me levanto más tarde, a las nueve o diez. A mí me gusta mucho dormir.</p> <p>B: Sí, a mí también, pero tengo que trabajar para ganar dinero. Y... ¿te acuestas muy tarde? Yo , a las once o a las once y media...</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• A y B elaboran sus intervenciones.</li> <li>• Las respectivas intervenciones de A y B motivan las siguientes intervenciones.</li> <li>• Dinamismo conversacional (Briz y García-Ramón, 2021)</li> </ul>

Tras analizar la conversación de 12 parejas de estudiantes japoneses de ELE, se identifican 4 estrategias de toma de turno (toma de turno tras pregunta espejo, tras interrogativa, tras petición de confirmación y toma de turno sin pregunta) y se comprueba que hay una relación muy clara entre el

desarrollo de la competencia conversacional y el nivel de dominio de la lengua.

Para la evaluación, es aconsejable usar una rúbrica con criterios individuales y criterios de pareja, como la que se muestra a continuación.

**Rúbrica para la evaluación de la competencia interaccional en niveles iniciales mediante pruebas en parejas (Kley, 2019)**

Criterio	Necesita mejorar	Regular	Bien	¿Individual / pareja?
Inicio de nuevos temas	No inicia nuevos temas (los inicia el interlocutor)	Inicia nuevos temas, pero solo con preguntas	Inicia nuevos temas con estrategias variadas	Individual
Elaboración del tema	Apenas expande sus intervenciones o las del interlocutor; no hace preguntas relacionadas	Expande alguna intervención suya o del interlocutor; hace algunas preguntas relacionadas	Expande sus intervenciones o la de su interlocutor, hace numerosas preguntas relacionadas	Individual
Uso de las preguntas espejo	Con mucha frecuencia	En algunos casos	Con muy poca frecuencia o nunca	Individual
Cambio de tema	Realiza cambios de tema abruptos	Realiza cambios de tema abruptos y cambios suaves.	Realiza cambios suaves en su mayoría.	Pareja

En cuanto a las características de la conversación en español, en japonés y en la L2, se comentan las siguientes características a partir de un corpus oral creado por el ponente: los turnos de habla en español y en japonés, los turnos de apoyo, las alternancias de turno y las alternancias de código.

- 1) Los turnos de habla: el turno de habla es la unidad estructural de la conversación delimitada por el cambio de hablante. Estos se construyen de manera interactiva y emergente, se van realizando en cada momento. El hablante tiene que ser capaz de adivinar cuándo va a terminar el turno de habla (proyección) y puede intervenir en el turno, por ejemplo, con turnos de apoyo (permeabilidad). En japonés, esas pausas están marcadas con un recurso simple, sintáctico (las partículas pospuestas o verbos en gerundio, por ejemplo) y prosódico. Con esas marcas se abre un espacio de interacción que facilita la participación mediante turnos de apoyo o elementos

quinésicos, por ejemplo, movimientos de cabeza. Este es un esquema de interacción muy distinto del español, donde los grupos entonativos tienen una cadencia y no hay tantas pausas interiores. Los estudiantes de ELE extrapolan o emplean un recurso de pronunciación y de entonación y un patrón de interacción propios que no se corrige con las clases de pronunciación, sino que se corrige más bien durante la interacción.

- 2) Los turnos de apoyo: son turnos puramente estructurales, sin contenido semántico, que no hacen avanzar la conversación, son recursos de cooperación durante la conversación. En japonés, los elementos cuasiléxicos son los más frecuentes y se producen en posición en el interior de cláusula, mientras que en español abundan los adverbios de afirmación y negación y se colocan más bien tras conclusión gramática.
- 3) Las alternancias de turno: para realizar una tendencia de turno, necesitamos unas marcas de final de turno, y estas marcas son diferentes en español y en japonés. Existen diferentes tipos de alternancias de turno: la alternancia de turno propia es cuando el turno está marcado correctamente como terminado, y la alternancia impropia es cuando el turno no está marcado para su final y, por lo tanto, se interrumpe. Las marcas de final de turno que se emplean en español son generalmente prosódicas (hay un movimiento tonal descendente y en el punto inmediato del final se realiza la conclusión gramatical.). Sin embargo, en japonés, como lengua que sitúa el verbo normativamente al final del enunciado, se emplean más frecuentemente marcas sintácticas (cópulas, partículas finales, formas de petición imperativas, etc.). Además, las alternancias impropias en español son del 50% entre los hablantes nativos, es decir, se interrumpen mucho, pero funcionalmente, por ejemplo, adelantan el turno o piden explicaciones.
- 4) Las alternancias de código: ocurren cuando en la interacción usamos una palabra en otro idioma sin cambiar la lengua de la lengua de interacción. Los estudiantes japoneses del corpus usan

recursos de la L1 principalmente para realizar funciones discursivas, por ejemplo, autorreparación o manejo de la agenda temática. Se trata de recursos léxicos muy sencillos que ya conocen pero que no emplean porque no se les ha enseñado la función discursiva en cuestión.

En conclusión, la conversación es un tipo básico de interacción que se caracteriza por ciertos rasgos, como la libre alternancia de turnos, la escasa planificación y el dinamismo. Aunque el funcionamiento de los sistemas de organización conversacional es universal, puede estar sujeto a variaciones culturales. La conversación en japonés se distingue de la conversación en español por la fragmentación prosódica y sintáctica de los turnos, el uso de frecuentes turnos de apoyo cuasiléxicos en posición de no completación y el empleo de marcadores sintácticos de fin de turno. Es posible que estas características influyan en la conversación en la L2 de los alumnos japoneses y, por tanto, es importante la enseñanza explícita de las prácticas interaccionales y de los recursos para llevarlas a cabo mediante la práctica repetida, la retroalimentación dinámica y acumulativa y un método de evaluación válido.

## **BIBLIOGRAFÍA:**

García Ruiz-Castillo, Carlos (2022) Creación de un corpus oral para el estudio de la conversación en español de aprendientes japoneses de ELE, *Hiroshima Studies in Language and Language Education*, 25, 155-170, 20220301. (<https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/journals/h-gaikokugokenkyu/i/25/item/51967>)

García Ruiz-Castillo, Carlos (2023) Las alternancias de turno impropias en la conversación en español como lengua extranjera de aprendientes japoneses, *Hiroshima Studies in Language and*

*Language Education*, 26, 105-121, 20230301. (<https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053523>)

García Ruiz-Castillo, Carlos (2023) Dinámica de grupos e interacción entre pares en la enseñanza en línea del español como lengua extranjera en el contexto universitario japonés, *Comunicación, traducción pedagógica y humanidades digitales en la enseñanza del español como LE/L2/LH*, 181-191, 202312. ([https://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca\\_ele/asele/pdf/32/032\\_0016.pdf](https://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/asele/pdf/32/032_0016.pdf))

García Ruiz-Castillo, Carlos (2024) La conversación en ELE de aprendientes japoneses: posible influencia de la lengua materna y alternancias de código en la interacción, *Interacción, discurso y tecnología en la enseñanza del español*, 35-45, 202407.

([https://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca\\_ele/asele/pdf/33/033\\_0003.pdf](https://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/asele/pdf/33/033_0003.pdf))

連続公開講座

魔術的リアリズムの国、南米コロンビアの魅力を知る（全3回）

第1回

2024年10月22日（火） マルチメディアホール & オンライン

“魔術的リアリズムの国” 南米コロンビアってどんな国？

その魅力を紹介：コロンビアの魅力

—産業、文化、観光、食文化等

ゴメス, フアン・カミロ

(コロンビア大使館商務参事官／

コロンビア投資貿易観光振興機関 (ProColombia) 日本代表)

**Descubre Colombia fascinante, un país de “realismo mágico”**

**¿Qué tipo de país es Colombia?: ● descubre sus atractivos.**

**● Industrias, cultura, turismo, gastronomía etc.**

**GÓMEZ, Juan Camilo**

**(Consejero Comercial de la Embajada de Colombia en Japón /**

**Director ProColombia en Japón)**

Abstract:

We would like to discover with you the many facets of Colombia, a country that combines the richness of nature with vibrant cities. We will explore the dynamic industries and investments, the vibrant culture that fascinates the world, and the diversity of tourism from the dreamy beaches to the spectacular mountains. In addition, we will also get to know the delicious gastronomy with the unique original tastes and the ancestral traditions in Colombia. You will definitely be captivated by Colombia, a country of beauty.

本イベントにご参加いただいた皆さま、そして私たちと共にこの場を共有して下さった皆さまのご健康を祈りながら、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございます。そして、皆さま、良い午後をお過ごしください。この場にいることに非常に感激しています。また、招待して下さった林先生と友人の福嶋さんに心から感謝いたします。彼のおかげで、この場に立つ機会をいただき、とても嬉しく思っています。そして、これからの60分間、私が皆さんにお伝えしたいのは、ちょっとした「好奇心」についてです。コロンビアを語る時、最初に伝えたいのは、この国がどれほど多様で、いかに音楽に満ちてい

るかということです。そして、私たちコロンビア人が情熱的な人々であることが、互いを結びつけていると私は信じています。今日は皆さんが退屈して眠らないように、何か興味を引きつける内容をお届けできればと思います。

最初に話をする前に、パンデミック中に企業で働いていた経験について触れたいと思います。日本で3年間暮らし、このような素晴らしい特権と機会を得たことは、私を一人の人間として、そして公務員として大きく変えてくれました。そして、多くの視点を私に与えてくれました。この機会を与えてくれた母国政府に心から感謝しています。私はボゴタ大学の学部からスタートし、そこから国際関係について勉強を続けています。常に国際関係への強い関心と好奇心を持ち続けてきました。そして、その好奇心の結果、今日はここにいることができます。

私たち両国間の経済関係がどのように未来を形作るのかについて述べたいと思います。しかし、それが新たな問題を生み出す可能性もあることを理解しています。そこで、今日のプレゼンテーションでは以下の5つのポイントについて話します。

1. 国の一般的な情報：コロンビアの基本的な情報を提供します。
2. コロンビアの生物多様性について：コロンビアが持つ様々な形の生物多様性についてお話しします。
3. 6つの主要な地域とその詳細：コロンビアの6つのマクロ地域を説明し、それに加えて興味深い料理の詳細についても触れたいと思います。
4. 日本とコロンビアの繋がり：両国間の繋がりや連携について述べます。
5. まとめと展望：時間の都合上、会場内で必要な部分を簡潔にお話しさせていただきます。

私たちはコロンビアの3つの山脈に誇りを持っています。そして、多くの方々がビジネス目的で訪れ、最終的にはその魅力に惹かれて滞在するようになります。また、楽しみのために訪れた人々はビジネスチャンスを見つけます。これが私たちの招待状です。ぜひコロンビアを訪れ、この国の美しさを発見し続けてください。ここにいる皆さんの中で、コロンビアに行ったことがある人はいますか？手を挙げてください。ここにいる人たちが、2年後には倍になるように、コロンビアを訪れる人が増えることを目指しています。既にコロンビアにいかれた事の有る方はまたコロンビアを再度訪問されることを願っています。

では、最初に基本情報です。コロンビアは南アメリカに位置する国で、正式名称はコロンビア共和国です。首都はボゴタで、人口は5100万人です。人口構成としては非常に若い世代が多く、例えば日本のようなアジアの国々と対照的です。公用語はスペイン語、通貨はコロンビア・ペソです。時差は14時間で、季節はありません。年間を通じて気候は非常に安定しており、気温は標高によって異なります。コロンビアは広大で多様性のある国で

すが、非常に若い国でもあります。そして、季節がないため、1年中同じような気候が続きます。コロンビアは非常に多様な国です。ビデオでもご覧いただけるように、この多様性は国の特性によるものです。

次のスライドでは、コロンビアの人々の多様性を強調したいと思います。コロンビアは、ヨーロッパ、アフリカの移民、先住民などの故郷であり、文化的な多様性により多民族・多文化国家となっています。この文化的な豊かさは、私たちの伝統や習慣に反映されています。ビデオで見られたように、コロンビアは非常に多様性に富んだ国です。特に1991年の憲法制定は重要な歴史的出来事です。1991年のコロンビア憲法では、先住民に特別な管轄権を付与しました。この政治的進展により、国の先住民に自律性と独立性が認められるようになりました。1991年には地域の保護法も制定され、先住民コミュニティはしっかりと保護されています。コロンビアには86の異なる先住民文化があり、26の異なる言語が話されています。この民族的・文化的多様性は、私たちのアイデンティティの重要な部分であり、コロンビア人としての私たちを豊かにしています。

また、動植物の多様性も特徴的です。例えば、コロンビアは世界で最も多くの鳥類とランが存在する国として知られています。また、植物、両生類、蝶、魚類においても世界第2位、ヤシの木や爬虫類においては第3位、哺乳類では第4位です。コロンビアには3,500種以上の蝶類が生息しており、爬虫類は630種類に上ります。コロンビアには470種の哺乳類が生息しています。

さて、ここからは国内の主要な6つのマクロ地域を紹介していきます。この地図にはそれぞれの地域が示されています。西部地域、東部地域、カリブ地域、太平洋地域、そして緑色で示されているアマゾン地域です。

これから皆さんが興味を持つであろう6つの地域についてお話しします。最初はボゴタ



が位置するアンデス地域です。ここは伝統的にチーズ入りホットチョコレートやジャコ（伝統的なスープ）を楽しむ場所です。銅で舗装された通りを歩くと、私たちの起源を感じることができます。これらの道は、大通りや建物、英雄たちが築いた場所へと繋がっています。この地で歴史が紡がれ、山岳地帯のパラモス生態系やヤギたちが行き交う場所で物語が生まれました。そして、エル・ドラドの伝説のようなユニークな教訓を教えてくれる土地でもあります。この地には、カラフルな湖や秘密を抱えた公園、そして先住民の歴史があります。これは目には見えなかったかもしれませんが、今日、皆さんを驚かせるに違いありません。

首都ボゴタの街をご紹介したいと思います。この写真には、建築的に重要な価値を持つ

非常に有名な建物が写っています。それは「トーレス・デル・パルケ」と「サンタマリア闘牛場」です。この建物はコロンビア人建築家のロヘリオ・サルモナによって設計され、首都の中心部にある非常に特別な場所です。これらはパラモと呼ばれる独特の生態系です。ここに見えるのはフライレホンという植物で、「オレハス」のようなものがあります。これらの「オレハス」は空気中の水分を吸収し、国内の様々な地域、特に東アンデス山脈での水の生成に貢献しています。このパラモと呼ばれる地域はコロンビアでは非常に特別な場所です。フライレホンは天然のスポンジのように機能し、水を保持し供給します。フライレホンという名前の由来は面白いですね。ハイキング中に、その名前がスペインの植民地時代の修道士に由来することを学びました。修道士たちは頭頂部が禿げていて髪が少なく、この湿った森を歩いているときに、誰かがその姿をこの植物に例えたのです。そのようにしてこの植物は名前を得ました。歴史と自然をつなぐ興味深い関係ですね。

次にお話するのはカリブ海沿いの地域です。この地域は、異なる独特の美しさを提供しています。壮大な岩から7色のビーチ、そして印象的なシエラネバダまで、様々な景観が広がっています。この場所は、自然の風景と豊かな文化が融合しており、ガブリエル・ガルシア＝マルケスにインスピレーションを与えた黄色い蝶の物語などの伝説や歴史も含まれています。カリブ地方には、世界で最も海に近い高山であるシエラネバダ・デ・サンタマルタがあります。標高5,500メートル以上のこの自然の驚異は、サンタマルタ市の近くにあります。シエラネバダはまた、文化的豊かさと生物多様性に富むタイロナ国立自然公園に囲まれています。これらはUNESCO世界遺産の一部であるテユナの段々畑です。下にはアルワコ族などの部族が見えます。彼らは千年の伝統と自然との深いつながりを維持しています。彼らはこの地域を世界の心臓部と考え、その保護に努めています。UNESCOの世界遺産に登録されている失われた都市（シウダ・ペルディダ）も、この文化的豊かさの一例です。アルワコ族は今でも自然と調和して生活し、その保全を大切にしています。カリブ地方はまた、ノーベル文学賞作家のガブリエル・ガルシア＝マルケスとその魔術的リアリズムにインスピレーションを与えました。この地域は活気に満ち、文化的アイデンティティを反映するフェスティバルやカーニバルで溢れています。ポスタ・カルタヘネーラやモテ・デ・ケーソなどの料理もあります。

コロンビアの太平洋側は、手つかずのビーチと豊かな生物多様性で独特のコントラストを提供します。マリンバの音を聞き、何百人もの人々がサルサのリズムに合わせて踊る様子が見られます。これはアフリカのルーツから来る情熱です。この地域には、豊かな自然がまだ多く残っています。この地域はアクセスが難しく、必要なインフラが整っていないため、未開の自然、手つかずのビーチ、そしてジャングルが広がっています。この写真に写っているのは、太平洋に面する豊かな海です。これはコロンビアが太平洋、そしてアジアへの扉となる地域です。また、音楽の話をする、太平洋地域はサルサが盛んな地域です。このリズムはアフリカからの移民によってもたらされました。サルサはこれらのコミ

ユニティの文化を反映し、人々が楽しむリズムの象徴です。

では、次の地域、アマゾン地域に進みましょう。アマゾン地域を探索するなら、タタコア砂漠のような驚くべき場所を訪れるべきです。北部ではテホのようなワインの産地があります。一方、南部では緑と赤の山々、コーヒー農園、そして古代の文化を垣間見ることができます。さらに南に進むと、古代の人々が石に刻んだ驚くべき物語を発見できます。それは、コロンビアの精神的遺産の一部です。また、「ラス・ラハス聖堂」の美しさに驚くことでしょう。この場所を見てください。美しいです。スマートフォンの画面をスクロールするのをやめて、この場所を訪れてください。コロンビア、美を生きる国です。

コロンビア高地の話飛ばしてしまいましたが、次はアマゾン地域です。先ほどのビデオではコロンビア高地、そしてアマゾン地域を紹介しました。ここでは、カウボーイたちが平原とジャングルの中に楽園を発見しました。青い山から、過去が今もなお息づいていることを知ることができます。ここでは、沈む太陽が地平線と空をつなぎ、川の近くはカチャマスの魚やキャッサバ芋でいっぱいです。また、グエハル溪谷のような壮大な場所もあります。ここではハーブがティプレやマラカスとともに響き、今でも聞こえる美しい歌が奏でられます。これが私たちが語る美しさであり、何千年も前にジャングルの中心、リンドサやセロ・アスルで生まれたものです。この場所は、ボラ族、ウイトト族、マクナ族など、数多くの先住民族の物語をインスパイアした地です。この地域には、「カニョ・クリスタレス」という多彩な色を持つ川や、地球上で唯一のピンクのイルカなど、ユニークな自然が存在します。

日本とコロンビアの繋がりについても触れたいと思います。たとえば、現在、日本が輸入するコロンビアの主要製品であるグリーンコーヒー（生豆）は、コロンビアから日本への輸出の 50%以上を占めています。現在、グリーンコーヒーはコロンビアから日本への主要輸出品であり、日本への輸出全体の 50%以上を占めています。「エメラルドマウンテン」という高品質なコロンビア産コーヒーのブランドは、1970 年の大阪万博で日本に初めて紹介されました。エメラルドマウンテンは当時のキャンペーンが非常に興味深いもので、コロンビア国立コーヒー生産者連合が行ったプロモーションによって、コーヒー輸出量が毎年増加し、グリーンコーヒーの販売は年間 2 億 5,000 万ドルに達しました。次に重要な輸出品は生花です。コロンビアは多様な種類の花を生産していますが、日本で最も知られているのはカーネーションです。また、コーヒーや花だけでなく、サッカーや野球といった文化的な交流も行われています。もしまだ「テホ」や「ボリラナ」というコロンビアの伝統的なゲームを見たことがないなら、終了後に残った方々にはスタッフがデモンストラーションを行います。テホのルールとしては、投げた石が火薬の上に当たり爆発すると「メチャ！」と叫びます。

次に、日本人観光客についてお話しします。日本人はコロンビアを訪れることにますます関心を寄せています。2021 年には約 3,800 人の日本人がコロンビアに住んでいました。

一方、日本には約 1,410 人のコロンビア人が住んでおり、そのうち 430 人は 25 歳から 40 歳の若者です。

今年でコロンビアと日本の外交関係は 116 周年を迎えます。日本はアジアの国々の中で最も長い歴史を持つコロンビアのパートナーです。初期の日本人移民の多くはカウカ溪谷に定住し、現在約 3,000 人の日系人の子孫がいるとされています。日本で知られるもう一つの著名なコロンビア関連の文学作品は、ホルヘ・イサークスによる小説『マリア』です。この作品は非常にロマンチックにコロンビアを描写しており、日本人移民に大きな影響を与えたと言われています。

コロンビアと日本の関係は非常に活発で、特に経済関係が中心です。日本企業はコロンビアの豊かな資源に大きな関心を寄せています。昨年、両国間の経済・貿易関係は約 20 億ドルに達し、前年と比較して 18%増加しました。私の経験では、コロンビア人には大きな革新能力があります。これは、日本との関係を築いたスタートアップやビデオゲーム企業に反映されており、彼らの創造性と両国間の関係を強化したいという意欲を示しています。特にコロンビアの若者たちは革新的な能力で際立っています。日本に才能を持ち込んだビデオゲーム開発者の例がそれを示しています。

主要な産業は、以前は炭化水素や石炭、石油といった天然資源に関連する分野が中心でした。しかし、近年ではそれが変わりつつあります。現在は、生物多様性を尊重し、持続可能なプロジェクトが求められています。このプレゼンテーションには含まれていませんが、若者たちが日本とつながる大きな関心を持っている分野として、例えばビデオゲーム、アニメ、マンガといった日本文化も挙げられます。これらはコロンビア人にとっても人気があります。



フアン・カミロ・ゴメス氏 (2024年10月22日)

第2回  
2024年11月12日(火) マルチメディアホール & オンライン

知られざるコロンビアの素顔  
—その魅力と歴史—

寺澤 辰麿  
(日本コロンビア友好協会会長/  
元駐コロンビア共和国特命全権大使)

**La cara oculta de Colombia:  
su encanto y su historia**

**TERAZAWA, Tatsumaro**  
(Presidente de la Asociación de Amistad Colombia Japón /  
Ex-Embajador de Japón en Colombia)

Resumen:

1. La visita a Japón de Nicolás Tanco Armero y su vida: el colombiano llegó al puerto de Yokohama en noviembre del cuarto año de la era Meiji (1871). Fue la primera persona en publicar un diario de viaje posterior a la Restauración Meiji en español. Se presentará la historia de su visita a Japón y de la sociedad colombiana, haciendo un repaso de su vida. 2. Las peculiaridades políticas, económicas y sociales de Colombia y sus atractivos: Colombia se asocia inmediatamente con la falta de seguridad, pero se explicarán las causas de ello y las razones por las que esta imagen ha arraigado, así como los milagros del crecimiento económico y la historia del gobierno constitucional, que ha construido un sistema político democrático. 3. Relaciones diplomáticas con Japón: la conclusión del Tratado de Amistad en 1907 y la historia posterior de la inmigración.

はじめに

福嶋先生、ご紹介いただきありがとうございます。本日は福嶋先生のご好意により皆さんにコロンビアのお話を差し上げる機会を与えていただきまして誠にありがとうございます。今日の私の立場はどういうことかと申しますとコロンビア大使に任命された時にコロンビアの事情をいろいろ勉強しようと思ひまして本屋に行つて政治経済社会を探してみたのですがほとんど本がありませんでした。あつたのはゲリラの話とか誘拐の話とか、またまた麻薬のカルテルの話だとか、それからコーヒーとかエメラルドといったようなこ

とであってですね、体系的にコロンビアを勉強しようということについてはほとんど資料がございませんでした。赴任してからコロンビアのいろんな政治経済社会について実際に触れて、かついろいろ現地で本を買って歴史を学んでいるうちにですね、日本にはほとんど知られていないなという印象を持ちました。そのためコロンビアを去るときに、私は3冊の本を書きたい、一つは社会情勢、なぜ治安がこんなに悪くなったのか、本当に治安が悪いのはコロンビアの国民性なのかというようなことを分析して書きたいと。もう一つは経済について、20世紀の100年間でコロンビアの平均成長率は5%で、マイナスになったのは大恐慌の1929年と30年、それから世紀末のアジア通貨危機の1年と3回だけで平均的に成長しているのですね。人口は1900年に約500万人強だったのが現在5000万人を超える人口になっている。大変な増加をしているわけですね。どうしてそういうことが生じたのだろうということについて分析をしようということでした。三つ目は、コロンビアの経済が安定しているのはなぜかということを考えますと政治体制にあるなと思います。政治体制も南米と違う特徴として、いわゆるポピュリズム、経済学的に言いますと放漫財政で国民の関心を買うといったようなばらまき政策をしないで財政の規律をきちっと保っているという政治体制です。それがどうしてコロンビアにおいて起きたのかその原因を勉強しようということでした。この3点について本を書きたいと言って日本に帰国をいたしました。その後現在13年経ちますけれども3冊本を書いたうえに、先ほど林先生がお話しされましたように明治4年に日本に来たコロンビア人の日本についての紀行文をぜひ翻訳して紹介したいなということで1冊翻訳をいたしました。社会について書いたのが『ビオレンシアの政治社会史』、ビオレンシアというのはスペイン語をやっている方はお分かりになるでしょうが英語で言うとバイオレンスです。副題は「若き国コロンビアの悪魔払い」、悪魔払いというのはいろいろ誤った認識をしているのを何とかそれを取り払いたいという意味でつけました。それから経済については『コロンビアの素顔』という本を書きました。それから政治については『コロンビア共和国憲政史』という本を出しました。これが一番新しい本なのですが、それと先ほどお話ししました翻訳本として『コロンビア商人が見た維新後の日本』というこの4冊を書いております。そういったことから今日はまずこの翻訳本についてお話をし、次にコロンビアの経済社会の特色についてお話をし、最後に日本とコロンビアの関係について簡単にお話をするというのが本日のテーマであります。

これから座ってお話をさせていただきたいと思います。目次を見ていただきますと第一がニコラス・タンコ・アルメロの訪日旅行記である『最近の旅行の思い出-日本』、翻訳名が、『コロンビア商人が見た維新後の日本』です。著者の略歴、この本の特色、マリア・ルス号事件との関連とこれは後でご説明します。第二が、コロンビアの政治経済社会の特異性とその魅力ということで、特異性についてお話しするためにはラテンアメリカに多く見られる共通点をまずお話をし、それとの対比でコロンビアの特異性が何故出たのかその背景と原因、それからそういったことを全部含めてコロンビアの魅力というふうにお話を

したいと思います。第三が、我が国との外交関係等ということで、外交関係の歴史、日系人の歴史、それから日本とコロンビアの現在の経済関係、こういった流れでお話をさせていただきます。

### 1. ニコラス・タンコ・アルメロの訪日旅行記 ―著者ニコラスの略歴

まずこの著者、ニコラス・タンコ・アルメロという人については、福嶋先生がどこから肖像を探していただいて、皆さんに提供していただきました。右側がシモン・ボリーバルということで、これはコロンビアの街のみならず、南米で最も銅像の多い政治家であります。スペインからの独立戦争の英雄ということでもあります。コロンビアはどこにあるかというのは、この地図で見ていただくとわかりますが、西は太平洋、北はカリブ海に面しておりまして、東にベネズエラ、南にブラジル、ボリビア、ペルー、エクアドルという国に囲まれている国です。後でまたお話ししますが、今のパナマというのは 1902 年までは、コロンビアに属していたわけですが、その後独立してパナマになりました。ニコラス・タンコ・アルメロの訪日旅行記をお話するのに、まずこの著者がどういう人であるかということですが、1830 年に誕生しておりましてボゴタで生まれて父親はシモン・ボリーバル大統領政権の大蔵大臣をしていた人です。簡単にこの頃のコロンビアを説明しますと、コロンビアは 1810 年に独立を宣言いたしております。なぜ 1810 年かと言いますと、ナポレオンがスペインに侵入してスペイン国王を廃位させて自分の兄をスペイン国王に就け、フランスが占領したところで、スペインの植民地だった南米各国が相次いで独立宣言をするということになったわけです。1810 年に独立をした後、スペインがフランスのナポレオンの没落に伴い 1816 年ぐらいから独立を宣言した植民地を再征服するレコンキスタといいますけれども軍隊を派遣するわけです。この頃のコロンビアの人口は 130 万人ぐらいですその人口のうち銃を持って戦える男性の相当な割合がこのレコンキスタの時に亡くなっているというのがコロンビアの歴史であります。その後、解放者であるシモン・ボリーバルがスペインとの戦いを行いまして 1819 年にコロンビアを解放する。その後、コロンビア共和国を設立して初代の大統領になり、南米各国の解放戦争を行うわけです。解放戦争を行うに際して大統領が不在のときに副大統領が国内の政治を行うのに何が必要だったのかというと解放戦争に必要な戦費の調達です。これを行ったのがフランシスコ・サンタンデールという副大統領です。このフランシスコ・サンタンデールとシモン・ボリーバルは若干思想的な考え方が違っておりまして、後で申し上げますけれども、コロンビアで二大政党ができる保守党というのがシモン・ボリーバル的な考え方を引き継ぎ、サンタンデールの考え方を引き継いだのが自由党で、1848 年に二大政党制になっております。そういった背景がありまして、1830 年にはシモン・ボリーバルは終身大統領を目指したのですが、反対され、病気になって亡くなってしまいます。その時までには大蔵大臣であったのが父親であります。したがって家庭環境としては非常に恵まれておりまして、

初等教育をニューヨークで受け、中高等教育をパリで受け、1851年21歳の時に帰国し父親と同じ保守党つまりシモン・ボリーバルの系統の保守党に入党します。当時の大統領は自由党だったので、これを大変痛烈に批判して逮捕・投獄され、3ヶ月後に出獄してキューバに亡命するという経歴です。1852年にキューバでハバナの製糖工場の管理職になります。コロンビアは1821年に一部の奴隷解放をし、1852年には完全に奴隷解放をしています。今から見ると考えられないことですが、16世紀にコロンビアにスペイン人が入植したときに先住民は約600万人いたと言われていたわけですが、すぐに50万人ぐらいまでなくなってしまいます。これはなぜかというハシカだとかインフルエンザだとか天然痘だとか旧大陸の病気が入ってきて免疫のない先住民がほとんど亡くなり、したがって大規模農業の従事者としてどうしても奴隷が必要になるということで、この奴隷貿易を担ったのはイギリスです。イギリスが工業製品をアフリカに持っていき、アフリカから奴隷を中南米に運び、中南米の砂糖をイギリスに持っていく三角貿易をやった。その中で奴隷を使ってキューバでも砂糖キビの栽培をし、砂糖を生産していたわけですが、徐々に各国で奴隷解放の波が来て、イギリスでも奴隷貿易を禁止するといったような中で、1855年にニコラスは、奴隷の代わりにクーリーを輸入するために中国に派遣されるわけがあります。クーリーに漢字を当てはめると苦勞の苦と力と書くので非常に奴隷的な印象の言葉ですが、そのクーリーを砂糖キビ栽培の労働者として中国から連れてくる募集業務を始めるという経歴です。

### 本書の特色

1859年にコロンビアに帰国をして『ヌエバ・グラナダから中国への旅』という本を書いています。これは4年間中国にいて中国を勉強して中国のことについて書いた彼の本ですが、それから何度か再び中国に行ってクーリーの調達をやっている。実は1869年にアメリカの大陸横断鉄道ができるというのと同時にスエズ運河が開通するわけです。それまで彼は大西洋からヨーロッパへ渡りヨーロッパからインド洋を経由して中国へ行っていたのですが、初めて1871年にニューヨークから大陸横断鉄道でサンフランシスコ経由して日本に来てそれから中国・ベトナムと今度は逆の周りで行く旅をするのです。その時に日本を訪問するというのが明治4年の12月の24日です。これはグレゴリオ暦で旧暦ではちょっと日にちが違います。その旅行後も何度も日本に来ておまして1888年にこの本を書いてスペイン語で出版しました。スペイン語で出版された南米の人間により出版されている初めての本ということになるわけです。彼の旅行記は、横浜から江戸、東京を通過して中山道をめぐって京都、大阪、神戸まで行くという旅行記の構成になっておりますけれどもこれが全部で旅行したわけではなくて当時明治4年、5年の時はまだ外国人は主要都市から10里以内しか動けなかったのです。ですから彼は10里までしか行っていないはず。その後何度か来て允準条例とか外人の旅行が徐々に緩和されて何度か来た

中でこの中山道を通る旅行をしているということです。最後には 新橋の鉄道まで出てきますし、京都から鉄道で旅行したという記事がありますので、その辺はそういうことかなというふうに思います。皆さんの中で渡辺京二さんの『逝きし世の面影』という本を読まれた方があるかもしれませんが、外国人が日本に来ていろんな印象を書いているそれと同じような印象を持っているんですけど、この本の特徴は日本の地理、歴史、歴史も古事記からずっと勉強し、文明、江戸幕府の状況、明治維新、明治政府、そういった維新後の日本が変わる前後を勉強してコロンビアの独立戦争以降の政治体制確立までと比較して書いています。西郷の乱ですね、明治 10 年の乱についても書いています。日本に来た多くの外国人が書いている宗教だとか文化、言語、教育等についても幅広く彼なりの見方をしているというのがこの本の特徴です。ただ唯一違うのは先ほど申しましたように中国に長くいて中国を勉強した本を書いているので、その中国をベースにまた日本を見ているというところもまた面白い見方で、中国と日本を比較しながら書いた本というのはあまりないと思うのですが、それも一つのこの本の特徴になっています。若干時間がまだありますか。面白い点を若干申し上げますと例えばですね、日本人の悪口もたくさん書いているのですよ。いいところだけじゃなくて例えば日本の文明について書いている中で日本人にはいわゆる自発性や才能の真の表現である創造性が全くない。そのため宗教から最近の進歩に至るまであらゆるものは外国から輸入されたものである。外国のものを自分のものにしなかったり吸収しなかったりすることは全くない。しかし何も発明せず何も創造せず 誰に対しても自分の才能を示す特別の標識を刻みつけることはない。科学の分野においてはあらゆる原理を盲目的に議論なしで何も気づくことなく受け入れる。文学や美術の分野においては完璧に模倣する。産業分野においては芸術的かつ厳密な綿密さで真似るというようなことを書いている。日本人は創造性がないということを何か所か同じようなことを書いています。また私が知らなかったことをいっぱい書いてあるのでそのことをちょっとご紹介しましょうか。維新戦争、明治維新前後の日本について書いているところでですね、2名のイギリス人を殺害した犯罪者の処罰を要求したということがあつて、これは生麦事件じゃないかなと思うのですが、「12 人の侍にあの奇妙な武士の栄誉の特権を再び利用することにより政治的に切腹するよう頼み込み、イギリスの領事の面前で悲痛な儀式を行わせた。実際、定刻にあの不幸な人たちが現れ、領事の前に順番に跪いて列を作り、そしてあの恐ろしい光景が始まった。合図がなされると、最初の侍が作法に従って腹を左から右に切り、その背後に次の順番の侍が苦痛の時間を短縮するために頸動脈を切り、伝統に従って口を下にして倒れ落ちた。これ以外の姿勢は臆病者の特徴であると考えられる。このようにして恐ろしい悲劇は最後の侍まで続き、彼には長く苦しめないように友人が息の根を止める同じ役割を果たした。うめき声も嘆き声も聞こえなかった。誰もため息すら発しなかった。全員が勇気と諦観を持って跪き、倒れ伏した死体となった。死の場面が終了し領事の冷ややかで落ち着き払って発せられたイギリス流のよろしい (all

right) という由緒ある言明で立会人たちは多かれ少なかれ悲しみに動揺した心持ちで、この恐ろしい殺戮の舞台から退出した」と書かれています。本当に高輪のイギリス領事館でこういうことがあったのか知りませんがこの本で私は初めて知りました。時間があればもっといろんなところをご紹介しますけど今日ちょっと女性がいらっしやるので日本の女性について「日本の女性は一般的に体が小さく、しっかりとした体つきで、感じの良い表情豊かな容貌をしている。その顔の造作は、この人種に共通のものであり、顔立ちは、顔面は垢抜け方が少しばかり足りず、目は中国人のようにヘーゼルナツツのようだが、しかし、全体として見目よく、その行儀作法のしなやかさと人扱いの上品さは好ましい。フランス女性は例外として、日本女性ほど思わせぶりで気を引き、精神性の高い女性を知らない。洗練されたパリジェンヌと同じ魅力、同じ気品と小粋さを持っている。」これは珍しく褒めてあるところなのですが、日本人が階級をどういうふうに見ているかというところについて、「我々はほとんど日常的に個人が属する階級を洋服の仕立てにより認識するが、一方日本では、それは下駄の形で判断する。」と書いてあります。どういう下駄を履いているかによって階級が分かるというようなことが書いてある。「日本人は生まれつき怠惰で無気力であり、これはすぐに見てとれ、このことは日本人の生き方と習慣に表れている。中国人と異なり、浪費家であり、生きていくための金を稼げば満足している。生来懐疑的であり、また、独善的でうわべだけを繕い、腹を立てている時でさえいつも口元に微笑みを浮かべ、そして激怒せざるを得ないようになった時でも、どんなことでも派手に大笑いして噛み殺す。穏やかさと優しさを装って、心の奥底の怒りを隠し、インディオ先住民のように、ずる賢く、下心があり、また恨み深い。」もっともっと書いてあり、そうかなと思うようなことがありますけれども、もしご関心がある方は読んでいただければありがたいと思います。今日少し本を用意しておりますので後ほど大幅ディスカウントでお分けしたいと思います。

### マリア・ルス号事件との関連

この本を読んでいただければお分かりになるのですが、面白いことが日本で起こっておりましてマリア・ルス号事件というのがあったのです。明治5年7月横浜港で停泊していた軍艦イギリスの軍艦アイアン・デューク号が海上で漂っている男を救助したところ、その男は修理のために停泊しているペルー船マリア・ルス号から脱出した中国人のクーリーであるということが分かりました。同船はマカオからペルーに中国人クーリーを運ぶ途中でありまして、船内には230人余りのクーリーが鎖でつながれ閉じ込められている状況。英国領事から報告を受けて、これは処罰しなければいけないということだったのですが、神奈川県令の陸奥宗光は、国際的な裁判を県が引き受けることにとても消極的でありました。明治4年の12月に岩倉使節団が条約改定のために出ているわけですね。陸奥宗光は、条約改定の交渉をしなければいけないそういう時に変なことをしたくないと考え、裁判を

しないと主張しました。当時まだ司法制度が完成していないので裁判権は各県の県知事(県令)にあったわけだから、その県令である陸奥宗光がこの裁判をしなければいけなかったということなのですけれども、陸奥は嫌ですと言って拒否するわけですね。英国公使のワトソンが、副島外務卿に対し、奴隷状態にあるクーリーの事件に国家としてきちんと対処しなければ、日本は国家として認められませんよというふうに言ったので陸奥は辞任をして、ナンバー2であった大江卓、この人は高知土佐の人ですけれども、県令になって裁判を行って、日本の領海内で中国人の人権を侵害していると、ペルー人の船長ペレイロを有罪と判決をいたしまして、ただクーリーを解放すればマリア・ルス号は出港してもいいという判決を出しました。この事件のクーリーが このニコラス・タンコ・アルメロが日本から中国へ行って募集した中国人ではないかなと私は思い調べました。その結果、この裁判記録の被告に、ニコラス・タンコ・アルメロの名前が載っておりました。したがって彼が香港等へ行って、中国人のクーリーを 3ヶ月ぐらいかかけて募集して、それをペルーに運ぶ途中船のマットが故障したので横浜港で修理をしていた、その時に起こった事件だということが分かりました。この大江卓っていう人はすごい男で、陸奥と一緒に倒幕と藩閥政権を倒そうというので反乱を起こそうとして見つかって投獄されるのです。陸奥も投獄されます。そういう人ですけれどもこの裁判をやるというときに万国公法を勉強するのですね。ものすごいスピードで勉強して、判決を出すのですけれども、この被告側の弁護人が英国人のフレデリック・ディケンズという人で、彼は、船長のエレーロが主張しているように、この契約がマカオで締結されているので準拠法はマカオであって日本法で裁くことはできない、さらに、外国人の裁判というのは居留地各国の領事の意見を聞いてその合意のもとに判決しなければいけないということを言って、当時負けるとは思っていなかったようです。もう一つこの弁護人は、日本には「女郎の年季公証文」というのがあって、娘を女郎として売るときに何年でいくらだというのを文書にしているわけで、日本だって人身売買をしているのではないかと、なぜこのクーリーの契約が違法なのだと主張して、日本は裁判できないよという弁護をしているわけです。ですからペルー側としては負けるとは思っていなかったのですけれども先ほど言いましたように大江は万国公法で、領海内で起きた事件であり、鎖で繋がれ閉じ込められており、しかも中国人の誇りである弁髪を切っており大変な人権を侵害しているんだと言って、これは乗客の虐待であり人権侵害であるということ根拠に有罪としているわけです。ペルーはこれを怒りまして国際仲裁裁判所に提訴いたしました。これはまた面白いんですが、ロシア皇帝が仲裁裁判所の裁判長になって これは奴隷契約だから人道に反して無効だという判決をするのです。当時明治5年6年の頃の裁判ですけれども、これが日本にどういうことを与えたかといいますと、明治5年10月ですからその年の10月に芸娼妓開放令を政府は出しているんです。この人身売買はいかんといいのでそれまでの江戸時代から続いていたそういう慣習を無効にしています。それと旅券の発行について、日本人が働きに行く際の旅券の発行を厳格化して、日本人も奴隷に

なつては困るということで海外の雇用契約は1年限りというふうに決め、それについては米国の領事の確認を取れということでアメリカに行く場合にはちゃんと領事の確認を取つて1年限りしか行けないというようなことを明治政府はやったのがこの事件の顛末です。以上がこの本に関するお話であります。ちょっとこの明治5年という時期ですね、これをちょっと覚えておいてください。後でまた出てきます。

## 2. コロンビアの政治、経済、社会の特異性とその魅力 —ラテンアメリカに多く見られる共通点等

次にコロンビアの政治経済社会の特異性とその魅力についてお話しするわけですが、まずその何が特異かということを理解するためには、ラテンアメリカの一般的な傾向をまず頭に入れていただければと思います。ブラジルはポルトガル植民地ですから除き、スペインの植民地支配はどういう支配だったかということ、入植者に大規模な農地を委託して先住民を労働力として使用することを認めるといふ大土地所有制と先住民使用を認めたエンコミエンダ制といい、各国社会が誕生する際の最大の要因ですけれども、これは大体各国共通です。それから先ほど言いましたようにコロンビアにおいて、600万人もいた先住民が1600年には50万人に、約100年で10分の1以下になってしまった。したがって労働力のために奴隷を持つてくる必要があった。これも各国共通です。ナポレオンのスペイン侵攻後各国が独立を宣言した。これも同じですね。言語はスペイン語、宗教はカトリック教、人種、歴史これもほぼ同じ。19世紀にカウディージョという言葉をお聞きになったことがあるかもしれませんが、政治ボスによる専制政治が各国で多く見られております。これは政治的野心を持った人物が、私的な軍事力を持って長期間にわたり政治を行うということで、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン、メキシコ等々でこういった専制政治があった。それから第二次世界大戦後、これは大変罪なことをしたなと私は思うのですけれども、国連のラテンアメリカ経済委員会というのがあって、これが輸入代替工業化政策というのを導入提唱します。ラテンアメリカ経済委員会の事務局長というのはアルゼンチンのラウル・プレビッシュという人でありまして、プレビッシュ・シンガー命題というのがあって、先進国は工業製品を輸出する、開発途上国は第一次産品を輸出する、そうすると経済が成長していくと工業製品の需要は高まるが、第一次産品等の需要はそれほど高まらない、したがって先進国に貿易条件として有利になっていき、開発途上国はますます不利になるというのがこのプレビッシュ・シンガー命題です。したがって、ラテンアメリカは輸入品を国内生産に変える輸入代替工業化すべきであるという提案をするのです。これを成り立たせるためには、高関税による保護支援と補助金を交付する政策で、第二次世界大戦後、各国は輸入代替工業化政策を行います。お聞きになったかもしれませんが、1970年代前後は、ラテンアメリカの奇跡と言われて、ラテンアメリカ諸国は経済が大変伸びます。日本も当時はラテンアメリカに3割から4割投資をしていました。それぐらいラテンアメリカがブ

ームだったのですね。これは当初はうまくいったのですけれども、やはり保護主義による工業化で補助金漬けにすることで競争力はなくなっていき徐々にこれは破綻をしていくわけです。たまたま70年代に石油危機が起こって、ユーロダラーという石油マネーがヨーロッパ、アメリカの銀行を通じてラテンアメリカにドーンと流れていくわけですね。どんどん投資しろということの結果、何が起こったかという、債務危機です。80年代がメキシコ、ブラジル、ウルグアイ、ベネズエラ、ペルー、これが債務危機になって、それから90年代がメキシコ ブラジル アルゼンチンに債務危機が起こっていくわけです。なぜ起こったかという、ご承知のように保護して競争力のない産業を維持し、また新たに短期のドルを借りて工業投資を一生懸命やりました。しかし、アメリカが猛烈な高金利政策を採っていきました。高金利になると短期で返せなくなってくる。債務危機になってくる。輸出力があれば返す原資ができるんですけれども輸入代替ですから輸出じゃないのです。輸入代替ですからただ国内で作るだけなので外貨を稼ぐ力はなく債務危機が起きたということです。であともう一つ、ラテンアメリカに見られる共通点の中で最大のものはポピュリズムがあります。典型的なのは、アルゼンチンのファン・ドミンゴ・ペロンとその奥さんのエビータ、エヴァ・ペロンがやったばらまき政策ですね。財政の均衡を意識せずにどんどん庶民に金をばら撒く、これはおそらく先ほど申しましたように大土地所有で上流階級と下層階級に格差が固まっている中で、この上流階級を破ろうとしたらこの下層階級を使って票を取るしかないわけですね アルゼンチンなんて一番工業化が進んでいた国だったわけです。20世紀の初めアルゼンチンはもちろん農業国で大変な富があってG5の一国だったのです。そういう国で工業化を行い、ペロンが労働者を味方としてポピュリズムで大統領になるのです。ペロンというのは軍人だったんですけれども、イタリアに駐在してムッソリーニがイタリアで勃興するときに彼はムッソリーニのやり方を見ていました。第二次世界大戦後大統領に就任すると、ムッソリーニ式の「諸君！明日から君たちの給料を倍にする」というような演説で人気を取ってやった。その結果、現在アルゼンチンはかつての面影はもうないとてもひどい状況になっているということです。大なり小なりこういったポピュリズムで政権を取ろうとする動きが各国共通にありました。コロンビアにもこういったポピュリストはいないわけではなかったんですけれども、選挙で負けるか、それとも暗殺されるか、ということで今までのところ典型的なポピュリストという政治家はコロンビアの政治ではありません。

### コロンビアの特異性

じゃあコロンビアはどういう特異性があるのだということですが、先ほど申しました1810年の独立宣言以降、立憲政治の進展と早い段階からの二大政党制が確立しています。1848年に自由党1849年に保守党が誕生しました。1848年に自由党が成立したのは1849年の大統領選挙のために自由党という党を作って大統領候補を選出したのです。それ

に対して保守党は、カトリックの大司教が自由党は宗教の自由を言っているわけですからカトリックの国教を守るために作らせた。二大政党が1848年49年に確立してそれからおおよそ30年おきにどちらかが政治を行うということになります。これが1991年まで続きまして後でご説明しますが、1991年の憲法改正で二大政党制が崩れることになります。これは政党要件を緩和したからです。日本も二大政党が望ましいと言っていますが、今は多党制ですよ。私はこのコロンビアの歴史をずっと見ながら二大政党は良くない。アメリカの二大政党を見ていいと思う方いますか。大統領候補の討論会なんか悪口の言い合い嘘のつきあいみたいなものですね。あんなことで大統領が選ばれるというのは決していい感じではないですよ。むしろいろんな意見を議論してどの意見が一番いいのかというようなそういう形が、私は不安定かもしれないけれども健全な政治になるのではないかなというふうに思います。また、伝統的に言論の自由が尊重されていたということです。この本（『ビオレンシアの政治社会史』）にも書いているのですが、19世紀に政府を批判する漫画がいっぱい掲載されているのです。とんでもない風刺漫画ですけど、政府はこんなひどいことをやっているということを堂々と公表している。日本の19世紀江戸時代にそんなことをやったら手鎖100日とかされてとてもじゃないけど牢屋に入らざるを得ないような状況ですけど、堂々とした雑誌で漫画が出ている。ということは言論の自由がこの頃からきちっとあったなというふうに思います。それから専制政治家シモン・ボリーバルは終身大統領になりたかったけど、それに対して国民はノーと強い抵抗をしてなれなかった。そのために1830年に大統領を辞めて外国に亡命のために行くことになります。ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアを解放し、ボリビアなんかシモン・ボリーバルの名前をつけているのですよ、そういう世界で一番有名な解放者でもきちっと議会でノーと言われて退任せざるを得ないというそういった伝統があります。それから経済成長は先ほど申しました20世紀平均5%であるというようなこと、それからハイパーインフレーションや債務危機を全く経験していない。私は1975年から1978年までアルゼンチンの二等書記官でおりましたので当時1000%のインフレを経験しました。1000%のインフレはどういう状況かというと、まず物がなくなるのです。肉屋に行っても肉がない。「親父、肉欲しいけど値段はいくらでも」と言うと奥から出してきてくれるというのが買い物のやり方。また、銀行には定期預金がなくなります。1000%のインフレで定期預けたらこんなバカなことはないですよ。それから闇レートが発生します。安定した通貨にみんな逃げますから闇屋でドルが非常に高い値段で売れている。しかし高くてもですね、ひと月経てばものすごい価値になるんです。1000%ですからね。そういった経験をいたしました。コロンビアってすごいなと思ったのは、1970年代の後半、石油危機の後、農産物価格がものすごく暴騰します。その時、コーヒー価格が大変暴騰するわけです。ポンド2ドルぐらいだったのが5.83ドルまで上がる。外貨収入がものすごく増えるわけですね。この時に外銀がコロンビアに「お宅は借入れ余力があるからどんどん金を借りて投資すべきではない

か」と言うわけです。けれども当時のアルフォンソ・ロペスという大統領は、「いやいや金融政策の柔軟性を保つために過去の債務を今返済するんだ」と言って、政治家でみんなに歓迎される政策を取らずに過去の債務を返済して将来の金融政策の柔軟性を維持したいのだと断るのですね。したがって債務危機になってないのです。そういうのがやっぱり政治家も非常に優れているなというのがコロンビアで感動した一つのことですね。だからポピュリズムが誕生しないということについては、グスタボ・ロハス・ピニージャという軍人が少しポピュリスト的な人で2期目も大統領に就任しようとするのですが、彼は選挙で落選しました。それからホルヘ・エリエセル・ガイタンという政治家がいますけども、これは民主党の中で急速に伸びてきた人で、今回のこの会合でガルシア=マルケスの話を聞かれると思いますが、その『百年の孤独』の舞台となった United Fruits Company という会社がありまして、そのストライキを応援して自由党の中で伸びてきた人です。この人は、1948年にボゴタで暗殺されるのです。したがって彼が当選したらポピュリストとされたであろう人がダメになりました。コロンビアではポピュリストというのはこの2人ぐらいじゃないかなと思います。なお参考までに今回の話について私がちょっと変なことを言ってもいかなかなと思いますけど、私の『ビオレンシアの政治社会史』の中で述べていることを少し言いますと、バナナの生産増進のために United Fruits Company は鉄道を引いたり灌漑をしたりでものごとで投資をするわけです。そういった中で輸出が増えてコロンビアにとっては良かったわけですが、労働組合の中に共産党員が入ってきましてストライクをやり、どうにも収まらなくなって軍がスト破りで発砲して13人が亡くなるのです。労働者13人が亡くなることで労働者が反発をして大暴動が起き、それをガルシア=マルケスは、3000人が殺され死体は貨車で海に捨てられたと書いたわけです。私が調べた中では、学者のダノは、60人ぐらいから70人ぐらいしか死んでいないと言っています。ガルシア=マルケスの数字は、非常に誇張であり彼の話は後でまたしますが事実ではないということでもあります。それから外国企業を国有化するだとか軍事クーデターもコロンビアでは起きていません。それから唯一コロンビアで不幸なのは、キューバ革命が1959年に起こりましてその後ゲリラが対岸のコロンビアからずっと南米に入ってくるわけです。ですからコロンビアはゲリラの影響を一番受ける。ゲリラの中でもキューバからモスクワから中国からといろんな派のゲリラが出てくる。これが、1960年代です。このゲリラが出現して最初はゲリラの勢力も大したことはなかったのです。このゲリラの資金源は、最初は誘拐だったのですが、その後、麻薬、コカインがおおきな収益源となりました。誘拐ということに日本人はとてども恐れますけれども、誘拐というビジネスを成り立たせるにはどういうことが必要かということ、絶対に安全に引き渡さなきゃいけない、誘拐を成功させるためには殺してしまっただけではどうにもならないのです。安全にその人を引き渡す、そのために身代金を取るのが誘拐の基本です。それでやっていたわけですが、資金源を麻薬、コカインに切り替えたのです。資金源を切り替えて資金が豊富になってゲリラの勢力が非

常に強くなったのが 1990 年代から 2000 年の初めぐらいです。これが、国内の治安をものすごく悪くし、特に麻薬組織カルテルが治安を悪化させ、麻薬の取締りをする警察署長や裁判官はみんな殺されるというようなことがあって、治安が悪くなりました。なお、コカインというのはコロンビアの専売特許みたいに思われているかもしれませんが、実はコカインはチリでまず始められました。コカの葉からコカインを生成する技術はドイツの科学者が発明したのです。コカ茶とかコカの葉からお茶にして飲んだりしてもいわゆるアルカロイドは出てこない、何ともないのです。私も、ペルーでマチュピチュに行くためにクスコの町、標高 4000 メートルに行った際、頭が痛くなりホテルに置いてあるコカ茶を飲んで頭の痛みがなくなったという経験をしました。コカ茶の効果そのものは問題ないんだけど、そこから化学的処理をしてコカインを生成すると強烈な麻薬作用があるというのです。ドイツ人が多いチリで このコカインがまず生成されて流通するようになったわけですけども、1973 年にピノチェットがクーデターを起こし、軍事政権が決定的にこの麻薬組織を潰すのです。チリにおけるコカインビジネスのノウハウをコロンビアに持ってきたのがパブロ・エスコバルという天才的な実業家ですね。昔はコロンビアにはコカの葉の栽培がそれほどなかったので、ペルーやボリビアからコカの葉をジャングルに輸入してきて、そこで生成をしてアメリカに輸出するというビジネスモデルを作ったのです。大変な金儲けをして、メデジンという街に競技場を作ったり、住宅を寄付したりして国会議員になったのです。その国際ビジネス組織をメデジンカルテルといいます。やがてゲリラがそのノウハウを仕入れて資金源にし、治安が非常に悪くなりました。

### 特異性の背景と原因

じゃあなぜコロンビアにおいてはそのような特異性が生じたのかという理由ですけども、一つはアメリカの独立宣言、それからフランス革命の人間と市民の権利宣言、これがすでにコロンビアではアントニオ・ナリーニョが翻訳をして知識階級にはそれが全部もう理解されていたことで、これに影響を受けた独立宣言を書いているということです。独立宣言は、1810 年ですが、日本はまだ江戸の中期後半ぐらいですかね、もう主権在民という観念を出しており、そういった立憲政治の歴史伝統がある。また、コロンビアというのは地理的には 3 本の山脈が南北に連なっているのです。それが 3000 から 5000 メートルぐらいの山脈で非常に高い。そうしますと国土の中でその山脈で区切られた国内の交流が非常に少ないために、地方の政治ボスというのが力を持つわけです。その政治ボスというのは大土地所有制の地主ですから、政治ボスが小作人等を全部抱えて政治をするといわゆる縁故政治システム、クライアンテリズムといいますか、スペイン語ではクリエンテリスモといいますけれどもそれが存在をするという地理的な要因がございます。そのために中央集権にするのか分権にするのかというのが基本的な政治イシューなのです。それぞれ地方が分かれていますから、中央集権じゃなくて地方分権の方がいいのではないかと、これが基

本的な自由党と保守党の考え方の違いです。保守党は中央集権、自由党は地方分権を主張し、これにカトリック教会を国教にするかどうか、基本的人権、自由の範囲をどこまで認めるか、それから経済的な自由主義か保護主義か、といったような論点で二大政党で論争を起こしている。先ほど言いましたように、伝統的に言論の自由が尊重されており、政府の政策に対してマスコミや学界からの開かれた議論が存在しています。政治の担い手である大土地所有者というのはインフレを嫌う傾向があるということで、平時において放漫的な財政運営を許さない政治風土が誕生した。ポピュリズムが政権を取れなかった要因としては言論の自由による政策批判に加えて、労働組合の組織率が低いことがある。アルゼンチンはかなり労働組合の組織率が高かったので労働者に向かって労働者諸君といえど票が取れたのですが、コロンビアでは組織率が低く、縁故システムによる選挙だったことが影響している。在任中、コロンビアで何回か選挙がありましたけど、街宣車が出て何とか候補をよろしくなんていうのは一回も聞いたことがないですね。私がいままで外に出なかったからかもしれません。いわゆる組織選挙です。ミゲル・ウルティアという国連大学の副学長をしたコロンビアの先生がコロンビアの中央銀行の総裁をした人なのですが、彼がなぜコロンビアにポピュリズムが誕生しないかという理由の一つとして、日本と同じだとして書いている。選挙が縁故政治で組織選挙だから大衆に向かってやっている選挙じゃないんで、ポピュリズムにならないんだというふうにウルティアさんは言っています。それから大蔵大臣と経済企画庁長官というのは政治家ではなく、学者か実業家が就くという慣行がある。なぜかというところ、縁故政治ですからみんな利益誘導するわけですね。そういうのを防ぐために、学者か実業家に大蔵大臣や経済企画庁長官のポストをやらせるという慣行にしているということです。それから、特異性の原因の中では、さっき申し上げました、貧富の格差がまだ大きく存在しますので、ゲリラ組織や麻薬組織の温床となる。貧しいから犯罪が多いのではなくて、貧しい地域でもゲリラや麻薬がないところは犯罪が少ないのです。ゲリラや麻薬組織があるところに犯罪があるということでもあります。それから多くの政治経済社会のリーダーというのは欧米の大学院を卒業した人です。2001年にイングリッド・ベタンクールとクララ・ロハスの女性二人が組んで大統領選挙に出たのです。この2人は行ってはいけない地域に選挙運動に行くとファルクというゲリラに誘拐されました。イングリッド・ベタンクールはフランス国籍も持っている二重国籍でしたのでフランス政府もかなり彼女の解放をと言ってコロンビア政府にプレッシャーをかけ、ベネズエラのゲリラのシンパでもあるチャベス大統領にも働きかけ、チャベスの斡旋でイングリッド・ベタンクールが生きているという証を出せと言って手紙を書かせました。その手紙が私の在任中の2008年の7月に発見されました。その手紙については、日本でも翻訳されて『マンへの手紙』という本が出版されていますけれども、その中でイングリッドはなんて言っているかというところ、「私はジャングルの中で生きる意欲を失って元気がない。もう明日にでも倒れてもおかしくない状況です」と書いているわけです。一方、娘と息子に何と書い

ているかという、娘には「あなたはニューヨークで修士を取ったけれどもドクターコースを必ず取ること、息子にはミュージックをやってもいいけれどもハーバードかスタンフォードかイエルの大学院を卒業しなさい」と書いています。私は今にも死にそうよと書いている手紙に子どもたちはそう書いているのです。上流階級というのはみんなそういう欧米の大学院を出なければいけないというようなセンチメントがあります。

### コロンビアの魅力

そういう特異性を持った中で魅力は何かというと、言うまでもなく自由主義、民主主義に基づく法治国家がしっかりしている、それから外圧によらず国内制度を民主参加の下で改革することができる議会制度、さっき 1991 年憲法までは二大政党と言いましたけれども 1991 年憲法というのは、1990 年に大統領が交代してすぐ憲法制定会議を招集するので、その時、ゲリラも憲法制定会議に参加しなさい、会議の議員選挙に出なさい、と呼びかけゲリラも参加することになる。面白いことに二大政党ですから保守党と自由党系の憲法制定会議の議員がもちろんいるのですがともに過半数取れないのですね。今の日本みたいなもので、誰が取ったかという国民民主党の役割を取ったのはゲリラの構成員なんです。したがって憲法に、自由党も保守党も自分たちだけでは決められないので、結局ゲリラが言っていることをうんと言わなければ自由党も自分の政策ができない。その結果、非常に民主的な憲法になっていくわけです。380 条の条文があるのですが、憲法的でない条文ですね、社会保障費は毎年増額しなければならないとか、教育費は毎年増額しなければならないとかといったことも入っていて、それから二大政党はもうダメだということで政党要件を緩和して多党制にするといったようなことを規定している。それからその大統領はすごいことに、憲法制定会議で国民が 1990 年の 8 月からいろいろ議論し始め、実際の憲法制定会議は 1991 年 2 月から始まりますが、8 月にはもう憲法を作っちゃうのです。半年でその間に何をやったかという、ここに書いてありますような市場主義開放制度、為替は自由化、税制は改革して増税、金融は自由化、通商政策は自由化、労働改革等あらゆるものを改革してしまいます。この当時大統領だった自由党のセサル・ガビリア上院議員に、大使として公邸にお呼びして食事をしながら、自分は財務省の公務員として制度改革というのものはものすごく難しいんだと痛感しているが、なぜこんなにあらゆる改革が憲法改正と同時に一挙にできたんですかと聞いたところ、ははははと笑って「それは国会議員が憲法のことばかり頭にあって法案の意味が理解できなかったから改革がどんどん通っちゃったのだ」と笑っていました。だけれども、実際はそうじゃなくて、すごく緻密な計算をしてあって、この改革するとどこが不利になるか、不利になるところにはどういう餉をやるか、この改革をするとどこが有利になるか、有利になるところはどういうふうに対処するか等を緻密に考えているのです。法案を出すときに、全てあらゆる団体に対する対策を打って、こういう政策を一挙にやり遂げた。これだけの改革を一挙にすることは、も

う日本では絶対できないと思いますね。

それから制度改正として優遇された年金をカットしようとしたら、裁判所がそれは憲法違反だと言ったので、それじゃあ年金カットのための憲法改正をしようとしたりしてやるのが素晴らしいのです。こういうことができる国って、すごいなと思いました。これがその魅力です。現在の大統領はどういう人かというとな元ゲリラ構成員です。そういう人が大統領になれるって、まあいいか悪いか、これは悪いという人もいますけども私はすごいと思います。それから資源国です。あまり言われてないのですが、私はなぜベネズエラが石油埋蔵量世界一であって、エクアドルも石油があって、その中間のコロンビアにないのかと、石油公団に聞いたことがあるのです。そうしたら、地形の問題ですね、ここにあっても真ん中にあるということによくあることなんですということでした。そういうものかと思ってコロンビアで聞いてみたら全く違うのですね。資源があるところにゲリラがいるから探鉱できないのです。今どんどんどんどん石油の探鉱をしまして、産油量も増えています。その開発が遅れているということで将来資源国としての魅力もあります。また、国民性が非常に穏やかで平和的なのです。ガルシア=マルケスはこう言っています。「暴力小説は我々の歴史においてコロンビア人が有している国民性の唯一の正当な文学的激白である」と。で先ほど言いました『百年の孤独』でも非常に暴力的なことを書いているわけですが、彼はコロンビアの国民性が暴力的だということを言うのですね。そんなことはないだろうと私は思うのです。いろいろ調べてみると、例えばどういう地域で貧困があって犯罪が高いかどうかというのを定量経済学的に統計的に処理してみると、全く貧困と犯罪との関係は相関がないのです。何と相関するかというと、ゲリラの存在地域、麻薬組織の地域とが非常に治安が悪いという相関が高いんです。けれども、コロンビア人が暴力的だから治安が悪いのだよというようなそういう認識が日本人の頭にもあって、これは何とか解除しなきゃいけないというのが私の強調したいところなんです。ガルシア=マルケスはノーベル文学賞をもらったのですが、コロンビアの国民、特に文学界はガルシア=マルケスのノーベル文学賞を祝わなかったのです。喜ばなかった。1992年に知識人が50人で、ゲリラに対して公開書簡を出して、「諸君！君たちの戦いは歴史に逆行している」と書きました。それで『エル・ティエンポ』という有名な新聞は、「今日、ゲリラ兵士たちの孤独は測り知れない」と皮肉って書いています。『百年の孤独』に引っ掛けているのです。ガルシア=マルケスは、カストロニストで、カストロと非常に仲がいい。もともとゲリラのELNのカミロ・ロペスとも仲良くて、自分の子供の名付け親になってもらったりしています。国民性がコロンビアの治安が悪い原因だというふうに言っていることについて、みんなそう思われていますけど、日本人には彼の影響が非常に強いので、そうではないということを私は強調しておきたいと思います。財政規律の堅持について、憲法に財政の持続可能性を規定しています。それから伝統的に親米政権です。コロンビアの周りは左派政権です。ベネズエラ、ボリビア、エクアドル、ニカラグア、キューバとその

中に囲まれて親米政権を維持しています。皆さんご存知かどうか知りませんが、世界中のアメリカ大使館の中で一番館員の多い国はどこかご存知ですか。こう聞くと、イギリスだろうとかモスクワだろうとかパリだろうとか皆さん言いますが、コロンビアが一番です。アメリカはコロンビアに一番力を入れているのです。周囲を左派政権に囲まれたコロンビアが親米であるということが非常に重要なのです。1902年にパナマが独立するとき、アメリカは軍艦を派遣してパナマの独立を支援したのですが、それは、パナマ運河の協定をコロンビアの国会が否決したものですからアメリカはやったんですけども、その時の協定にあった賠償金と同じ額をウィルソン大統領が1925年に支払って、それ以来、コロンビアはラ米中最大の親米政権になっているということでもあります。



寺澤 辰磨氏 (2024年11月12日)

### 3. 我が国との外交関係等—日本とコロンビアとの外交関係

あと5分ぐらいで日本との関係を申し上げます。日本は、1908年、日露戦争が終わった後、コロンビアとの修好通商条約を締結します。南米で一番早かったのはペルーです。ペルーは1873年に外交関係を進めます。先ほど1872年を覚えておいてくださいと言いましたね。マリア・ルス号事件の翌年が外交関係開始の年なのです。ペルーはおそらく、これは私の推測ですが、領事裁判権を取るために早く条約を結ぼうとしたのだろうと思います。南米では最初にペルーです。それから、メキシコが1888年、それからブラジル、チリ、アルゼンチンが1698年に締結しますが、コロンビアは千日戦争という内戦を1899年から1902年までやっていましたので条約を結ばなくて一応条約を結んだ後1934年に公使館を開設しています。第二次大戦中日本は敵国になりましたが、1954年に外交関係を再開し、

2008年私が大使の時に100周年を祝いました。当時安倍元総理が日本コロンビア議員連盟の名誉顧問で中川昭一会長とともにコロンビアを訪れていただきました。その後投資保護協定、租税条約を結ぶなど両国関係は緊密化しています。

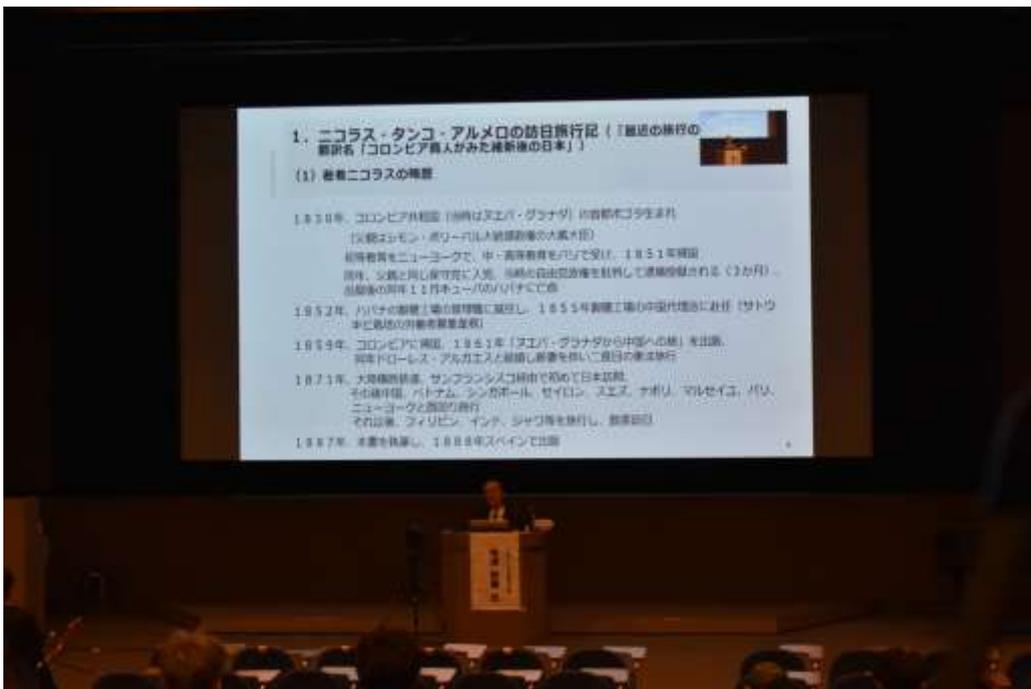
### 日系人の歴史

日系人移住の歴史は、1915年大正4年に小野小次郎という人が、パランキージャというカリブ海沿岸の都市に移住したのが初めてですけれども、彼は初めペルーに移住したんですが、コレラが発生したのでパナマに移って、パナマで散髪屋をやっていたんですけれども、胃の調子がずっと悪く、それならばパランキージャの近郊のウシアクリに泉があって、その水を飲むと治ると言われて、彼はコロンビアに移住して治ったのです。出身地である広島県の竹原市の道工さんと安達さんと呼び寄せて、パランキージャの日系人の源流になります。現在、パランキージャには600人ぐらいの日系人がいらっやいます。

集団移住は、非常にロマンティックな経緯があります。東京外大のスペイン語部の竹島雄三という人が、ホルヘ・イサークスの小説『マリア』を翻訳をし、これはバジェ・デル・カウカ県というカリ市のある県のパラソ（天国の意）という荘園を舞台に、エフラインとマリアの悲恋の物語です。それを讀んだ海外移民学校の学生4名が実習生としてコロンビアに渡航して、1年後に研修報告書を出しました。大正13年以降、アメリカで日本人移住移民の排斥運動である移民法が成立し、ブラジル、ペルーでも排日運動の動きが出てきます。拓務省は、アメリカ、ブラジル、ペルーに代わる場所を探していたところ、その研修報告書を読んで、竹島雄三らをコロンビアに派遣し、移住調査をやりました。1928年に計画を立てまして、1家族8ヘクタールとし、準備金1600円を持ってきたら移住して最初は8ヘクタールは貸与ですけども長年そこで生活すれば所有権を渡しますとしました。1929年に第一次移住者5家族が移住して、結局14家族全部で100名が集団移住しました。当初80ヘクタールぐらいだったんですけど8年後には220ヘクタールとどんどん規模拡大をしていきます。当時の1600円というのは家を1軒建てるのに1000円だったそうです。1600円持ってこいというのは3年分の生活費があればいらっやいということで、3年分の生活費を持ってきた人たちは規模拡大をして、コロンビアの移住者の歴史はミゼラブルではないんです。どんどん規模拡大をしていき、トラクターを使って機械農業をやった。第二次世界大戦前にアメリカは日本の移住地が非常に平坦でフラットでよく整地されているということで、これはパナマ運河の攻撃基地になる飛行場になるのではないかといいことを恐れて監視をします。戦争が始まると移住者の代表は強制疎開させられるといったようなことが起こります。対戦後、移住者の耕地面積5000ヘクタール、規模拡大をして現在3100人、法人の1300人と合わせて、コロンビアはブラジル、ペルーなどから言うて少ないです。

## 日本とコロンビアの経済関係

最後に輸出入ですけれども、大したことはないですね、輸出が 1363 億、輸入が 1170 億。非常に少ないんですがこれを 20 年前と比べますと輸出が 2 倍、輸入が 4.5 倍になっていますので、石炭等は非常に資源の開発が日本にとって大きい。コロンビアにとって日本は 17 番目の輸出相手国、9 番目の輸入相手国、日本にとってコロンビアは 47 位の輸出相手国、55 位の輸入相手国ということで、コロンビアの対内直接投資で 10 年間で日本は約 5 億ドルです。世界で 21 位、1 位がアメリカ、2 位がスペイン、3 位がパナマ、4 位がスイス、5 位がイギリス、6 位オランダ等々で、18 位に中国ですけれども、この中国の投資がどんどん増えて今や日本よりも多くなってこの伸びが大きくなっているというのが、あれでまだまだコロンビアは十分ではないなというふうに思います。したがってコロンビアについての情報をどんどん出して治安が悪いからとか国民性が凶暴だからとかそういうことではなくてちゃんと判断できるようになってもらいたいというのが私の願いであります。



寺澤 辰麿氏 (2024 年 11 月 12 日)

### 第3回

2024年11月26日(火) マルチメディアホール & オンライン

## ラテンアメリカ文学との出会い

木村 榮一 (神戸市外国語大学名誉教授/  
スペイン文学・ラテンアメリカ文学翻訳者)

### **El encuentro con la literatura latinoamericana**

**KIMURA, Eiichi**

**(Profesor Emérito de la Universidad de los Estudios Extranjeros de la Ciudad de  
Kobe / Traductor de la literatura de América Latina y de España)**

#### Resumen:

Aún está fresco en la mente que, en los países hispanohablantes del Nuevo Mundo, conocidos colectivamente como Hispanoamérica, han aparecido uno tras otro destacados escritores y poetas desde finales de los años sesenta, que han tenido un impacto en la literatura mundial. Es bien sabido que, entre ellos, el escritor colombiano Gabriel García Márquez, Premio Nobel de Literatura en 1983, ha fascinado y asombrado a lectores de todo el mundo por su novela *Cien años de soledad*, que narra la historia de una familia en un estilo excepcionalmente fantástico. En esta conferencia espero ofrecer una visión general de la literatura latinoamericana del siglo XX, centrándome en este autor.

ラテンアメリカ文学について何か話していただけないかとの依頼を受けまして、それなら二十世紀の中葉から後半にかけて世界中の読者を魅了、驚倒させたラテンアメリカの作家たちを紹介するのがいいのではないかと考えて、当時活躍した作家たち、とりわけコロンビアのガブリエル・ガルシア＝マルケスを中心に話をさせていただくことにしました。

ぼくがラテンアメリカの現代文学について知ったのは、まったくの偶然としか言いようのない出会いのおかげだったんです。大学に残ったばかりのころは、もっぱらスペインの現代文学を読んでいたのですが、肌に合わず、袋小路に入り込んだようになって悶々としていました。そんなある日、たまたま大学の構内に迷いこんできたひとりのメキシコ人に出会ったおかげで、目の前に新しい文学の世界が開かれたんです。というのも、そのメキシコ人に勧められた一冊の本が以後のぼく読書、いや、多少大げさに言えば人生そのものを変えたと言ってもいいでしょう。

ある時、そのメキシコ人と雑談していて、ふと、最近どうもこれぞという本に出会えなくて、この先どこに向かって行けばいいか迷っているんだとこぼすと、そのメキシコ人は、だったらアルゼンチンの作家フリオ・コルタサルが書いた『石蹴り遊び』という小説を読

んでみるといいよ、実は自分も今夢中になって読んでる本なんだけど、禅の修行をしようとして日本まで来たのも実はその本の影響なんだ、そう言って700ページ以上ある、枕にしたいような分厚い本をスーツケースから引っ張り出すと、自分は二冊持っているから、一冊進呈するよ、と言って手渡してくれたんです。

この作品の冒頭に出てくる一節「ラ・マーガに出会えるだろうか？」という、その時は意味不明だった一文になぜか衝撃を受け、訳わけの分からぬまま、ひょっとすると自分がずっと探し求めてきたのは、この本なのかもしれないと勝手に思い込み、「探し求めていた本にようやく出会えた」と独り決めしたのです。この一冊の本が豊穣きわまりないラテンアメリカ文学の世界に通じる最初の扉を、ぼくの前に開いてくれたと言っても過言ではなく、以後夢中になってコルタサル作品を皮切りに同世代のほかの作家たちの作品を読み漁るようになりました。

その少し前に、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』（鼓直訳、新潮文庫）が翻訳されて大評判になり、それがきっかけになって、日本でも（アルゼンチンが生んだ鬼才ホルヘ・ルイス・ボルヘスは別格として）それまであまり知られていなかったラテンアメリカの小説家たちへの関心が高まり、熱い視線が向けられるようになりました。当時はまだ未紹介だったコロンビアのガブリエル・ガルシア＝マルケスをはじめ、メキシコのカルロス・フエンテス、ペルーのマリオ・バルガス＝リョサ、チリのホセ・ドノソ、といった小説家たちも、脚光を浴びるようになったのです。むろんフリオ・コルタサルも例外ではありません。これらの作家たちがいわゆる《ラテンアメリカ文学ブーム》を牽引し、やがて世界中の文学ファンから熱い視線を向けられるようになるのです。

とりわけガルシア＝マルケスは、自らの作品の中で現実と幻想とを巧みに融合させて独自の文学空間を創出し、彼ならではの世界へと読者を誘ってゆく独自の手法で知られていました。ガルシア＝マルケスと言えば、幻想文学を得意とする作家のように思われがちですが、幻想性をたたえた小説は『百年の孤独』ともう一作、途方もなく残忍非道な独裁者を主人公にした『族長の秋』（鼓直訳、新潮社）の二作だけで、後者は百歳を超えた、いや、二百歳以上だとも言われる独裁者が主人公なのですが、現実的な要素と幻想的な要素をひとつに溶け合わせる技法に長けたガルシア＝マルケスの筆にかかると、実際に存在するはずのないこの人物でさえ実在していたのではないかと錯覚させられるほどの存在感が備わっています。このように、幻想的としか言いようのない作品を読んでも、それがまるで実在する世界であるかのような現実感、つまりリアリティを備えているように思えるところから、彼の作品は《魔術的リアリズム》と呼ばれるのでしょう。独自の語り口で幻想的な世界と現実的な世界をひとつに溶け合わせているからこそ傑作と評され、世界中にいる無数の読者を魅了し、惹きつけてきたのでしょう。

彼は1929年にコロンビアの田舎町で生まれたのですが、困ったことに父親が家に居着

かず、あちこちを転々として民間治療師や怪しげな仕事に手を出していました。時々生活費を送ってくださることがあるのですが、逆に金を送ってくれと言ってくることもありました。ガルシア＝マルケスがまだ幼かった頃に、母親は別の町で暮らしていた父親がおかしな事業に金を出していることに気づき、このままでは一家が破産するかもしれないと不安になり、足手まといの幼いガルシア＝マルケスを祖父母に預けると、まだ乳飲み子だったほかの子供たちを連れてあとを追ひ、夫が住む町へ行ってしまいます。ガルシア＝マルケス少年は、二、三歳の頃から、四、五年のあいだ母親の両親、つまりガルシア＝マルケス少年の祖父母のもとに預けられたのです。

幸い、この祖父母に大切に育てられてガルシア＝マルケス少年は伸び伸びと育ちます。祖父は内戦時に銃を持って戦った元軍人で、話し上手なこともあって、昔の戦友たちをはじめ友人、知人がしょっちゅう家に遊びに来ては、昔話に花を咲かせたそうです。ガルシア＝マルケス少年は部屋の隅に腰を下ろして祖父の友人、知人の話に耳を傾け、面白そうだなと思うとそれを記憶にとどめ、そうして聞き取った話の断片をつなぎ合わせてまったく違った物語をつくり、それを祖父の友人、知人に話しては、聞き手がびっくりするのを楽しみにしていた、と本人は述懐しています。相手がびっくりしたり、面白がったりする話を作るのが少年にとっては何よりもうれしく楽しいものだったんでしょうね。まさに、《天性の語り部》としか言いようがありません。

そうした幸せな日々は長く続かず、彼が六、七歳の時、祖父が病に倒れ入院を余儀なくされます。そのために彼は親もとに返されるのですが、それが原因で不安神経症気味になり一時期病院に通っていたそうです。

その時期を乗り越えて思春期を迎えると、精神的にたくましくなり、激しい不安感や妄想に襲われることはなくなりました。ただ、日々の暮らしは貧しさのどん底でした。まともな本など買ってもらえる状態ではなかったのですが、人並みすぐれた記憶力に恵まれていた彼は図書館を利用したり、友人から本を借りたりして読書に励み、その一方で勉学にも精を出し、成績は常にトップクラスを維持していたので、その記憶力に驚嘆した先生がたは、息子さんを上の学校に進ませてやるようにと両親を説得しました。母親が何としても息子を上の学校に行かせたいと考えて、彼のために手を尽くし、その上運がよかったこともあったのですが、無事に首都にあるボゴタ大学の法学部に入学します。創作をはじめたのはこの頃からで、当時暇な時に書いた短篇が時々新聞、雑誌に掲載されるようになります。入学後は経済的な面でいろいろ苦勞するのですが、何とかやりくりして大学に通ったものの、一年とたたないうちに内戦が勃発して、大学が封鎖されてしまいます。仕方なく北部の balankeyria という町にある大学に転校し、そこで勉学と執筆活動を続けるつもりでいたのですが、仕送りがほとんどなく、とてもやっていけず、生活費を稼ぐために新聞社で働きはじめます。下宿代をひねり出そうにも、夜は新聞社で新聞紙にくるまって寝たり、知り合いの下宿にもぐりこんだり、時には怪しげな安宿に泊まったりして何とか

やり過ぎたと本人は語っています。その町で同じく作家になることを夢見ている若者たちに出会い、彼らとしょっちゅう顔を合せては文学談議に花を咲かせたそうですが、この時期に出会った友人たちとはその後生涯にわたって親しく付き合うことになります。

当時、彼はすでに執筆活動をはじめていましたが、これといった作品を発表してはいませんでした。おそらく、この頃に彼の書いた作品は《習作》と言っていいものでしょう。当時、ラテンアメリカの文学は、リアリスティックな手法で書かれた作品が主流で、彼もその枠から抜け出すことができませんでした。しかし、やがて彼は作品の中に幻想的な要素を取り入れ、独自の世界を築き上げていきます。この転換がのちに彼を世界的な作家へと押し上げる一つの原動力になります。

信じられないような話ですが、実を言うとガルシア＝マルケスがラテンアメリカを代表する作家として注目されるようになったのは、『百年の孤独』を出版した1967年以降です。ほかの作家たちよりも多少遅かったと言えるでしょう。例えば、メキシコのカルロス・フェンテスは二十六歳の時に書いた小説『澄みわたる大地』（1958）（寺尾隆吉訳、現代企画室）で注目を集めていましたし、ペルーのマリオ・バルガス＝リョサも二十六歳の時に書いた小説『都会と犬ども』（1962）（杉山晃訳、新潮社）が高く評価され、その四年後の1966年に発表した『緑の家』（岩波文庫）で小説家としての地位を揺るぎないものにしていきます。

後に傑作『百年の孤独』という小説で世界中の小説愛好家や一般読者の心を驚つかみにするガルシア＝マルケスは、数年間特派員として数年間ヨーロッパに滞在し、記事を書いたりしては本国のコロンビアに送っていました。そのうち祖国では新聞社への締め付け、弾圧がきつくなり、海外特派員も給料をカットされるという状況になったために、やむなく新大陸に戻ることにします。そんな中にあっても何とかいい小説を書こうと頑張って執筆を続けていたんですが、いくら力んでも思うように自分の時間が取れず、筆も進まず苦しんでいました。先の見通しがまったく立たない上に、家族もいる状況のなかで、いっそのこと文学を捨てて、安定した収入の得られる映画の世界に飛び込んで、シナリオ作家にでもなろうかと思ひ悩むんですが、いや、もう一度挑戦してみよう、それでもだめだったら小説家になる夢を捨てて、また別の道を探ろうと心に決めて、最後の勝負に打って出ます。「自分がわくわくする、これは面白いと思えるような本を書いてみよう。それがだめなら、小説家になる夢は捨てるしかない」と覚悟を決めて書き上げたのが『百年の孤独』でした。すでに何冊か小説を発表していたガルシア＝マルケスには、友人、知人をはじめとするファンがいて、それまで彼らの前で自作の朗読をしてその反応を見ていたのですが、『百年の孤独』の一部を朗読したところ大きな反響があり、意を強くしました。また、口伝えでガルシア＝マルケスがすごい小説を書き、間もなく出版されるらしいといううわさも広がったのです。前評判通り、この小説は発売と同時に爆発的に売れただけでなく、世界中の国々で翻訳されて読者を魅了したのですから、人生というのはわからないもので、あきらめて

しまうとそこですべてが終わってしまうんですね。

先ほども述べたように、『百年の孤独』は出版される前から、作品の一部が雑誌に掲載されたりして前評判が高かったんですが、実際に売り出されると、信じられないほどの売れ行きを見せ、コロンビア国内はもちろん、ほかの中南米諸国でも爆発的に売れ、さらに英語をはじめ世界中のほぼすべての言語に訳され、どこでも信じられないほど大きな反響があり、売れに売れて世界的な大ベストセラーになったのです。ラテンアメリカの人びとはもちろん、世界中の人びとがこの本を通して魔術的リアリズムとはどういうものかを知ることができたと言われていました。

『百年の孤独』の舞台となっているのはマコンドという土地で、そこに住むブエンディア一族にまつわる物語は、コロンビアの歴史がファンタジックな形で投影されているだけでなく、幻想的でありながら、現実世界にしっかり根をおろしていて、たいへん楽しくもまた読み応えのある作品で、今なお世界中の読者を惹きつけてやみません。主人公と言える人物はアウレリャノ・ブエンディアで、彼は勝ち目のない内戦に参加し、やっとのことで生き延びるんですが、最後に彼が死んでしまうところで作品が終わります。作者ガルシア＝マルケスはアウレリャノの死のシーンを書き終えた後、泣き崩れたと伝えられていますが、彼は実在している人と変わらないほど深くあの人物を愛していたのでしょよね。この話は心に沁みるすばらしいエピソードで、忘れることができません。

『百年の孤独』を完成させた八年後の1975年に、ガルシア＝マルケスは『族長の秋』という独裁者を主人公にした小説を発表します。ガルシア＝マルケスに限らずラテンアメリカの作家たちは、中南米の独裁者がどのような統治をしていたのかを、容易に信じられないようなエピソードを通して語っています。ガルシア＝マルケスの『族長の秋』を例にとると、大統領が死去したという偽りのうわさを流させ、民衆が歓呼の声を上げて官邸にだれ込んでくるところを虐殺させたり、反逆を企てていた將軍をひそかに殺害し、その頭部をこんがり焼き上げて、料理のひとつのようにパーティの席に並べて列席者を震え上がらせたなどなど、自分に逆らえばこのような目に遭うかもしれないぞ、と脅しをかけているんですね。



木村 榮一氏 (2024年11月26日)

ガルシア＝マルケスの凄みは、このような物語を次々と生み出していることですが、ほとんどの場合、民衆が語るに際して誇張しているところはあるにしても、根も葉もない作り話ではなく、実際にあった事件が誇張されているだけなのです。『百年の孤独』も『族長の秋』も、それぞれ独特の幻想性で世界中の読者を魅了しましたが、そこにあるのは、どの国、どの土地であっても、そこで語り伝えられている物語をいく分か誇張、もしくは自分なりの色付けしたものにほかならないのです。

幻想的な作家と思われがちなガルシア＝マルケスですが、『族長の秋』はそれまでの作品とはまた違う方向性を持っています。普通、作家というのは一つのパターンができると、それで一生食べていけると言われています（もちろん、それが「当たった」場合ですが）。しかし、ガルシア＝マルケスはつねに違う世界を描こうと挑戦し続けていました。彼は「最低でも五年から六年の時間を空けないと、自分が納得できる作品は書けない」と語っています。

例えば、『コレラの時代の愛』という恋愛小説を見ると、コロンビアでコレラが大流行した時期に、ヨーロッパで学んだ医師が帰国し、懸命になってその治療に当たります。そんな中で彼はひとりの女性と恋仲になり、結婚して幸せに暮らすのですが、彼女に想いを寄せ続ける若い男がいました。この男は彼女の夫が亡くなるまで愛し続け、最終的に七〇歳近くになってようやく彼女と結ばれるという話です。

彼らが大河マグダレナ川を船で遡る場面では、嵐に見舞われ船が沈没しそうになりますが、「とにかく行くところまで行け」と主人公が言い放つ。この象徴的な場面が、愛の無限性を描いています。こうした作品を見ると、ガルシア＝マルケスが常に新たなテーマに挑戦していたことがわかります。

さらに、ガルシア＝マルケスは独立戦争の英雄シモン・ボリバルについても小説を書きました。この作品では、ボリバルがスペイン軍を次々と破り、ラテンアメリカ全体を独立に導いていく様子が描かれています。しかし、スペイン軍を追い払った後、内部の分裂が進み、統一国家の夢が崩れていきます。ボリバルはそれを恐れ、「統一しなければ元の支配に戻る」と警告しますが、志半ばで亡くなってしまうんです。この小説も、膨大な資料を徹底的に調査した上で描かれています。

ガルシア＝マルケスの晩年の作品には、川端康成の『眠れる美女』に似た短編もあります。この小説を書いた後、彼は執筆活動をやめました。普通、作家は『百年の孤独』のような大ブレイク作を出すと、それに似た作品を繰り返してしまうことが多いのですが、ガルシア＝マルケスは違いました。『百年の孤独』、そして『族長の秋』という二作で自らの作風を確立したと誰もが思ったあとも、歴史小説やリアスティックな作品、恋愛小説など、その時々スタイルを変えながらつねに挑戦し続けたのです。

並の作家ならとうていこのような離れ業をすることは不可能でしょう。変幻自在な彼の

作風を見ると、ラテンアメリカという広大な土地は、多種多彩な才能の持った作家たちを生み出すこの上ない大地なのだろうかと考えたくなりますね。

1930～40年代以降に、すぐれた作品を生み出した作家たちがいるのですが、そのうちの一人がアルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘスです。この作家の目くるめくほど該博な知識がちりばめられた短編やエッセイはヨーロッパの知識人たちを驚愕、驚嘆させました。彼の作品は、ヨーロッパの最高レベルの知識人たちでもかなわないほどの知識、深遠さ、それに面白さが備わっています。

ボルヘスの作品は、一度読んだだけでは理解できないものが多いのですが、何度か読み返していると、やがてその凄みがわかってきます。たとえば、『伝奇集』や『エル・アレフ』といったボルヘスの作品は、今も文庫本で手に入る名作ですので、ぜひ一度覗いてみてください。信じがたいようなエピソードが次々に語られていて、掛け値なしに面白いので、ぜひ一度お読みください。

ボルヘスと並んでよく挙げられる作家として、アレホ・カルペンティエルというキューバの作家がいます。彼はボルヘスほど偉大な作家ではないと言われますが、ラテンアメリカ文学の先駆者の一人です。ボルヘスとカルペンティエルは、いわゆるラテンアメリカ文学ブームより少し前の世代の人たちで、先駆者と言えるでしょう。

ボルヘスの博識ぶりは伝説的で、ヨーロッパの著名な文学者たちを仰天させました。彼はラテンやギリシャの古典をはじめイギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどヨーロッパの文学にも造詣が深く、何かの機会にラテン語やフランス語、英語、ドイツ語の詩や散文の一節をすらすら口にすると、それは大抵が古典的な詩の一節だったりするとのことでした。《記憶の人》として知られるボルヘスは、ラテンアメリカ文学の象徴的存在です。一方、カルペンティエルは《記憶の人》ではなく、カリブ海の目くるめくような魔術的、幻想的な世界を描いた作家として知られています。

ガルシア＝マルケスに関して言うと、その凄みは語る内容に応じて時に魔術的であったり、歴史小説的な客観描写であったり、新聞、雑誌のルポルタージュ風のものであったり変幻自在で、一言では語れません。たとえば、『百年の孤独』、あるいは『族長の秋』では、幻想的かつ魔術的な世界を描いたかと思えば、『コレラの時代の愛』という途方もない恋愛小説を書くに際しては、文体はあくまでもリアリスティックなのですが、内容的にはこのような生きざまは果たしてどの程度まで可能なのだろうと、不思議に思えてきます。何十年もの間、愛する女性を思い続け、その間にほかの女性ともいろいろあったにせよ、70歳を超えてまだ一人の女性を追い続けるこの人物の心中、またその相手の女性の心のさまざま葛藤をどう理解すればいいのか、まことに奥行きのある、いろいろと考えさせられる作品です。中でも、末尾で二人が船でマグダレナ川を遡ってゆく場面は、きわめて象徴的で心に残りますね。

ついで、彼はラテンアメリカ独立のために宗主国と戦い、植民地というくびきから新大

陸を解き放った英雄シモン・ボリバルをテーマに『迷宮の将軍』という小説を書いています。この作品は、膨大な資料を基に、ボリバルがどのようにスペイン軍と戦い、ラテンアメリカを独立へと導いていったかを描いた歴史小説です。この作品は単なる英雄譚ではなく、さまざまな葛藤、抗争、歴史の荒波、権力の座を狙う野心家たちの狂騒曲、混乱期特有のそうした混乱、騒ぎの中で独立を目指す理想主義者ボリバルの孤独な姿が浮き彫りにされています。

以上のように見てくると、ガルシア＝マルケスはまるで小説がたどってきた歴史を一人で辿り直しているかのような感じがします。本人が意図してそうしていたわけではなく、「面白いテーマ」を見つけると、それを小説に書きたいというやみがたい思いが自然と湧いてくるみたいですね。彼は気の置けない友人や知人と雑談や何気ない会話をしていて、その中からアイデアが思い浮かぶと「それ、ぼくに書かせてくれないか」と断りを入れて小説として書くこともあったようですね。

世界でラテンアメリカ文学が最初に注目されるようになったのは、1920～30年代で、この時期に創作をはじめた作家としてはアルゼンチンのホルヘ・ルイス・ボルヘスとキューバのアレホ・カルペンティエルの二人が挙げられます。そして、そのあとを追うようにして1960年代に登場してきたのが一般に《ブーム》の作家たちと言われる人たちで、彼らについては冒頭でもふれましたから、ここでは省略します。

世界の文学史を振り返ってみても、二十世紀後半のラテンアメリカのように、才能ある作家たちが次から次に登場してきた例はあまり見当たりません。その余燼は今も残っていて、広大な大陸のあちこちの国で若くて才能ある作家たちがいい作品を書いています。ただ、そういう才能ある若手作家を見つけ出すのは至難の業で、あなた方のように若い方であればできません。どうか、スペイン語で書かれている新聞、雑誌を図書館で探して、これぞという作家を見つけ出してください。

ぼくのような年寄りが若い方々、文学好きな方々にお問い合わせするのは唯一それだけです。

今日は取り留めのない話になってしまいましたが、最近では記憶力が目に見えて衰え、物忘れがひどくなりました。今回の話を「翻訳好きな老人の繰り言」と聞き流していただければ十分だと思います。



木村榮一氏（前列左から2番目）と山田善郎氏（前列右から2番目）（2024年11月26日）

## 教員エッセイ

### バルセロナ市の都市自治体関連獣皮紙文書群の調査について\*

中嶋 耕大 (関西外国語大学)

#### **Análisis de la serie de pergaminos municipales del Archivo Histórico de la Ciudad de Barcelona**

**NAKASHIMA, Kohta (Universidad Kansai Gaidai)**

Resumen:

La serie de pergaminos municipales es una de las agrupaciones de documentos conservados en el Archivo Histórico de la Ciudad de Barcelona. Esta serie es una parte de la primitiva colección de pergaminos medievales y modernos que guardaban las autoridades municipales de la ciudad. Las tipologías documentales en el período comprendido entre 885 y 1334 son muy variadas: privilegios reales, diversos actos jurídicos, escrituras judiciales, actos notariales, etc.

執筆時現在、筆者は、13・14世紀における君主（バルセロナ伯）とバルセロナ市との関係を君主代官を手掛かりとして研究している。その際、調査・判読の対象としている史料は、主としてバルセロナ市の「都市自治体関連獣皮紙文書群 (Pergamins municipals)」<sup>1</sup>である。筆者が研究対象とする時代の文書は専ら中世ラテン語で記されており、その判読に労を要するが、先述の文書群については、各文書の要旨や刊行史料の有無などを現代カタルーニャ語で記した7巻からなる目録<sup>2</sup>が刊行されており、他の文書群と比べて、その調査がいくらか容易になっている。ただし、当然ながら適正な史料批判をおこないつつ用いなければならぬ。その第一歩として、本稿では現時点までに判明した情報を整理し、上掲の文書群の来歴・性質などの把握に努めたい。

バルセロナ市歴史文書館 (Arxiu Històric de la Ciutat de Barcelona) の web サイト<sup>3</sup>によれば、同館が所蔵する文書史料は次のように大別されている。すなわち、(バルセロナ市の) 都市自治体関連文書史料 (fons municipals あるいは fons Consell de la Ciutat i Ajuntament

---

\* この研究は JSPS 科研費 JP20K13226 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> カスティーリャ語 *pergamino* / カタルーニャ語 *pergamí* は、日本語では一般的に羊皮紙と言われるものである。ただし、材質が羊の皮とは限らないため、本稿では獣皮紙と表現する。

<sup>2</sup> Mañé i Mas, Maria Cinta et Rovira i Solà, Manuel, *Catàleg dels pergamins municipals de Barcelona*, 7 vols., Arxiu Històric de la Ciutat de Barcelona, 2005-2013.

<sup>3</sup> 大別された文書史料ごとの目録へのポータルは“Fons documentals”: <https://ajuntament.barcelona.cat/arxiu-municipal/arxiuhistoric/ca/fons-i-colleccions/fons-documentals>、都市自治体関連文書史料の16の大区分と各目録へのポータルは“*Inventari de fons municipals*”: <https://ajuntament.barcelona.cat/arxiu-municipal/arxiuhistoric/ca/fons-i-colleccions/fons-documentals/inventari-de-fons-municipals> (閲覧日: 2024年12月31日)。

Modern と呼称される)、(都市自治体以外の) 諸機関関連文書史料 (fons institucionals)、私的文書史料 (fons privats) などである。このうち、都市自治体関連文書史料はおおよそ中世から近代(都市自治体設立が認可された 13 世紀中葉から 19 世紀初頭)までの時期のものであり、現在では 16 の大区分に分類されて管理されている。そのなかの「01. 都市自治体の設立と発展(01. Creació i desenvolupament del municipi)」という区分を「手稿(Manuscrits)」とともに構成するのが上述の「都市自治体関連獣皮紙文書群」という小区分である。

バルセロナ市がかつて保有していた同市関連の獣皮紙文書は、現在では二分されて保管されている。上掲の文書群は、その大半に相当し、885~1908 年の期間の 2688 点の文書(原本あるいは後年の筆写)が存在する(残りはアラゴン連合王国文書館(Arxiu de la Corona d'Aragó)が所蔵している)<sup>4</sup>。各文書の内容は多岐にわたるが、目録第 1 巻の対象期間(885~1334 年)に限れば、王権から得た特権状・特権確認文書、市が関わる法的行為についての文書(借用書、完済証明書、出納帳、地所の売買証書など)・裁判関連(訴訟、判決、調停、上訴など)の文書・種々の公正証書(特権侵害の訴え、永代貸借の設定、嫁資証書、権利譲渡証書など)がその中心となっている。また、他の都市(タラサ、サバデイ)や所領(アンプリアス伯領、フリクス、ラ・パルマ、ムンカダ)に関する文書も含まれているが、これは多くの場合、それらに対する権利をバルセロナ市が獲得した際にその保証として入手したことによる<sup>5</sup>。



司教座聖堂助祭の館 (Casa de l'Ardiaca) (バルセロナ市歴史文書館の建物) の外観  
(筆者撮影 2023 年)

<sup>4</sup> Rovira i Solà, Manuel, “Els pergamins municipals de Barcelona i la seva catalogació”, in Ramon Grau (coord.), *Vicens i Barcelona. Imatges històriques*, Museu d’Història de Barcelona/ Arxiu Històric de la Ciutat de Barcelona/ Institut de Cultura, Ajuntament de Barcelona, 2011, pp. 24-25.

<sup>5</sup> Mañé i Mas, Maria Cinta, *Catàleg dels pergamins municipals de Barcelona. Anys 885-1334 (Volum I)*, Arxiu Municipal de Barcelona/ Institut de Cultura: Arxiu Històric de la Ciutat, 2005, pp. 11-12.

以上を踏まえると、上掲の文書群を調査するにあたって留意すべきは、さしあたり次の点となるだろう。まず、各文書の内容から判断すると、同文書群はバルセロナ市の都市自治体が自らの権利の証明として保管してきたものと思われる。そのため、市当局によって何らかの選別がおこなわれた可能性があることを考慮する必要がある。次に、バルセロナ市の都市自治体に関する文書は、上掲の文書群以外にも、バルセロナ市歴史文書館内外に存在する。筆者の研究テーマにとっては、同文書館の「雑集 (Miscel·lània)」内の司法官 (veguer) 関連文書 (大区分「統治行為 (Acció de govern)」、中区分「都市自治体行政 (Administració municipal)」に属する)・諸機関関連文書史料に分類されている「司法官およびコレヒドールの法廷 (Cúria del Veguer i del Corregidor)」、さらにアラゴン連合王国文書館所蔵の獣皮紙文書群<sup>6</sup>などが将来的に調査すべき史料である。

---

<sup>6</sup> この獣皮紙文書群 488 点 (1225~1707 年) については、要旨を付した (一部の文書については本文全文を刊行した) 目録がカスティーリャ語およびカタルーニャ語で出版されている。カスティーリャ語版は Aragó, Antonio M.<sup>a</sup>, Costa, Mercedes (eds.) et Udina Martorell, Federico (dir.), *Privilegios reales concedidos a la Ciudad de Barcelona*, Archivo de la Corona de Aragón, 1971 (Colección de Documentos Inéditos del Archivo de la Corona de Aragón, vol. 43).

#### 編集後記

関係各位のご協力を得て 2024 年度も多士済々の講演者をお招きし、たいへん充実した講演を皆様にお届けすることができました。近年、コロンビアが誇るノーベル賞作家ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』が文庫本化されて、ラテンアメリカ文学ブームが再燃していることは喜ばしいかぎりです。一方、一つの分野に人生をかけてこられた講演者の含蓄のあるお言葉も印象に残りました。

今年はいベロアメリカ研究センターの生みの親である元本学顧問山田善郎先生にもご出席いただきました。山田先生に深謝するとともに、百歳を無事に迎えられることを関係者一同、祈念しております。

イベロアメリカ研究センター長 林 美智代

2025 年 3 月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801 (代表)

<http://www.kansaigaidai.ac.jp>